



目次 | CONTENTS

理事長就任挨拶／就任挨拶……………	2	受賞……………	16	病院紹介……………	24
平成30年度十全同窓会総会開催…	5	医師会コーナー……………	17	教室・支部だより／クラス会……………	26
物故会員……………	6	学会報告等……………	18	同窓生の消息……………	31
教授就任講演……………	10	金沢大学関連病院長会議……………	19	十全昔話……………	32
谷口昂名誉教授を偲んで……………	14	十全学術行脚……………	20	学生コーナー……………	34
鈴木大拙-西田幾多郎記念金沢大学 国際賞授賞式および記念講演会…	15	御遺骨返還式・合同慰霊祭……………	22	キャンパスビジット／医学展……………	35
		十全歴史ひろば……………	23	関東研究医養成コンソーシアム…	36

理事長就任挨拶



土屋 弘行

十全同窓会理事長に就任

会員の愛着と誇りに支えられ、 同窓会の発展に努めたい

この度、大井章史理事長の後任として理事長職を拝命いたしました土屋です。会員の皆様には日頃より医学類の学生支援や卒後研修などで大変お世話になっており、改めて感謝申し上げます。私は1983年に金沢大学医学部を卒業後、整形外科教室に入局すると同時に大学院医学系研究科に入学いたしました。大学院卒業後は、助手、講師、助教授(後に准教授)を経まして、2010年4月より、整形外科講座担当教授に就任いたしました。十全同窓会の発展のために全力で取り組んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

現在、宝町キャンパスでは重点整備事業をほぼ終えて、医学類正門から十全講堂正面までのプロムナード建設及び記念館の改修とその周囲に知的創造のためのスペースが建設されました。これらは、同窓会基金の協力があったからこそ成し遂げられたことで、会員の皆様に深く御礼申し上げます。また、金沢市との共同事業で、医学類前に遊歩道が整備され、既存の「医の源流 未来への継承 モニュメント」や「高安右人像」などと芸術的な調和を織りなしています。そして、附属病院の駐車場も整備され、新たに屋根付き駐車場や石川県の救急医療体制確立のためのヘリポートの建設が予定されています。石引通りから入って来ると、附属病院と医学類の複合体は極めて壮観な眺めであり、大変誇らしく思います。

2018年4月、医学系長・医学類長にご就任された和田教授は、医学系の独創性・多様性のある研究を一層推進することが重要であり、その特色、強みを最大限に活用して個々の研究の推進をはかるとともに、共同研究の発展に繋げていく方向性を示されました。金沢大学はスーパーグローバル大学創成支援事業に採択され、「卓越した成果を創出している海外大学と伍して、全学的に卓越した教育研究、社会実装を推進する取組を機能強化の中核とする国立大学」を目指しています。この明確な目標の達成に向けて、医学系の果たす役割は極めて重要です。十全同窓会としても、金沢大学医学類と医学系に対しまして

貢献をしていきたいと考えております。

国の存続には、一に教育、二に教育、三四がなくて五に教育、そして医療が非常に重要と言われています。医学生は大事な宝であり、大きな財産です。将来を見据えた医学類の教育を通じて人材を育成することは、急務かつ肝要な課題です。十全同窓会諸氏がこれまで築き上げてこられた素晴らしい医学類(部)の伝統を基軸に、将来の日本と世界の医療と医学の発展に寄与する人材を輩出することに全面的な支援をしていきたいと思います。そのために、医学系・医学類の教員の先生がたにおかれましては、教育カリキュラムの改善、国際認証取得、内科と外科の再編など教育環境の一層の整備と醸成を円滑に推し進めていただきたいと思います。同窓会としましても、充実した医学教育のもと、医学生が国内ならびに国際的な交流と連携を通じて社会貢献のできる医師を目指してほしいと考えています。

日本では、中学や高校に対する母校愛を抱いている方が非常に多いと思います。しかし、大学となるとどうでしょうか？金沢大学医学類の卒業生の方々に、ぜひともたくさん十全同窓会に入会していただきたいと思えます。この同窓会の新入会員の獲得に重要なことは何か？金沢大学、金沢大学医学類、そして十全同窓会に対してより一層の愛着と誇りを持っていただくことが必要と考えます。それには、金沢大学医学部の歴史を学ぶことが大切と考えます。先人に対する感謝と金沢大学医学部(類)の卒業生として誇りに目覚めると、自ずと生きる力が高まり、向上心、責任感、勇気、他者への思いやりと敬意など良い心が育っていきます。そして医師としての自信を形成することに繋がります。臨床研修制度が始まって以来、母校の卒業生の流出が進行しています。新たな専門医制度の発足で少し様変わりを見せようとしています。最終的には母校に対する愛着と誇りが無い限り現状を打破するのは厳しいと考えます。会員が誇りを持てる同窓会であり続けるように会員皆様の温かいご支援を賜りながら、私は、本会発展のためにできる限りの努力をいたす所存です。この度、網谷編集委員長のもと十全同窓会会報も一新され、より一層の同窓生の活躍を情報発信し、相互理解を深めていく予定です。

何卒よろしくお願い申し上げます。

就任挨拶



倉知 慎 博士
(平成9年卒業)

金沢大学医薬保健研究域医学系・分子遺伝学教授に就任

生化学を発展させ 世界に発信可能な人材育成

平成30年9月1日付で、金沢大学医薬保健研究域医学系・分子遺伝学(旧 生化学第一)の教授を拝命いたしました。

私は平成9年に金沢大学医学部医学科を卒業した後、小林健一教授が主宰されていた旧第一内科に入局いたしました。臨床研修を経て消化器・肝臓学研究室に所属し、金子周一教授のご高配により、平成12年から東京大学・分子予防医学(松島綱治教授)へ派遣していただき学位を取得いたしました。大学院修了後は、臨床研修時代に慢性ウイルス性肝炎・肝硬変・肝細胞癌症例を多数診療した経験から、ウイルス感染症に対する免疫応答に強い興味を抱いて基礎医学研究へ進み、CD8陽性T細胞の分化研究に一貫して取り組んでまいりました。松島教授のご指導のもと、反

復感染刺激が誘導するT細胞の老化現象やケモカイン受容体によるT細胞分化制御機構などを明らかにしてきました。この間、東京大学MD研究者育成プログラムにも従事し、現在の研究医養成コンソーシアムの設立に携わりました。平成23年から米国ペンシルバニア大学John Wherry教授のもとで、T細胞分化制御に関わる転写因子の研究に従事し、T細胞のパイオニア因子を同定して、転写因子複合体がクロマチン構造を調節する過程を明らかにしてきました。

今後は日米の経験を活かして、研究をさらに発展させ、学術動向や外部環境の変化に力強く対応でき、自ら変革を生み出して世界に発信可能な医学・医療人材の養成に取り組み、生化学と金沢大学のますますの発展に向けて全力を尽くす所存です。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともより一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



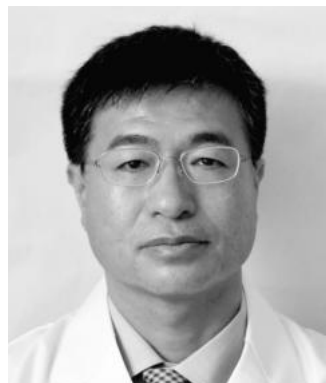
石崎 陽一 博士
(昭和60年卒業)

順天堂大学医学部附属浦安病院消化器・一般外科教授に就任

地域の消化器疾患治療の 中心的役割を担う

この度、平成30年5月1日付で順天堂大学医学部附属浦安病院、消化器・一般外科の教授を拝命致しました。私は昭和60年に本学を卒業し、東京大学医学部第二外科に入局しました。初任地の旭中央病院では2年間に約1,000例の手術に参加し手術の基本を身につけました。平成元年に帰局し、夭折された内視鏡外科手術の先駆者である伊藤徹先生のもとで、気腹下の循環動態の変動に関する研究で学位を取得しました。その後、東京労災病院で9年間、消化器・一般外科の研鑽を積んでいるなか、川崎誠治先生からお誘いがあり平成16年に順天堂大学医学部・肝胆膵外科に赴任しました。肝移植は手術手技、周術期管理において細心の注意が必要であり、この経験が私の外科医としての基礎となっていま

す。赴任当時、生体肝移植は右葉グラフトの全盛期でしたが私どもはドナーの安全性を考慮し、一貫して左葉グラフトを用いていました。左葉グラフトにおけるGraft inflow modulationは不要であるという主張は、当時は受け入れられず学会でもしばしば討論となりました。しかしながら順天堂の移植成績は全国平均に比べ良好で、現在は左葉グラフトが成人生体肝移植の第一選択となっています。浦安病院 消化器・一般外科は、腹腔鏡下外科手術で全国的に名の知れた診療科ですが、高度な手術技術が要求される肝胆膵領域の悪性疾患は症例が少なく、今後は症例数を増やし、安全で合併症の少ない手術をすることが私に課せられた命題と考えています。地域の消化器疾患治療の中心的役割を担う診療科となるように努力していく所存ですので、今後ともご指導のほど、よろしくお願い申し上げます。



石黒 洋 博士
(平成3年卒業)

国際医療福祉大学医学部臨床腫瘍学講座教授に就任

支持療法の臨床開発に貢献

平成29年7月1日より国際医療福祉大学医学部臨床腫瘍学講座(国際医療福祉大学病院腫瘍内科)教授に就任しました。金沢大学医学部医学科を平成3年に卒業しました。在学中に胃がん術後合併症で父親を亡くした経験から、がんの内科的治療に興味を持ちました。愛知県がんセンター福島雅典先生(後京都大学探索臨床腫瘍学講座教授)から、国内研修が未整備であった腫瘍内科という領域が米国ではすでに確立していると伺い、米国にて腫瘍内科専門医になることを決意、サッカー部顧問(故)正印達薬理学教授のお世話にもなり渡米しました。

ECFMG取得後にハワイ大学等の内科エクスターンとして米国医療に触れ、平成5年から東京海上Nプログラム3期生としてニューヨーク・ベイスラエル総合病院で3年間の一般内科臨床研修を受け米国内科専門医を取得、ニューヨーク大学病院腫瘍内科・血液科専門臨床研修に進み腫瘍内科と血液科の両専門医

も取得しました。週末はニューヨークリーグ所属チームでサッカーを続けるなど充実した留学生活を送り平成11年に帰国しました。

帰国後は千葉西総合病院で腫瘍内科・血液科を立ち上げ、各種固形癌の薬物療法から急性白血病の寛解導入まで行い、内科研修医教育にも従事しました。その後、千葉大学医学部病態病理学(故)石倉浩教授ご指導の下、病理学教室の医員・大学院生として病理診断および基礎研究に従事、学位(免疫不全状態での腫瘍由来IL-6の抗腫瘍効果)を取得しました。

大学院修了後は京都大学へご栄転された福島雅典教授(現医療イノベーション推進センター長)の下で腫瘍内科医としての研鑽と臨床研究の基礎を学び、戸井雅和乳腺外科教授の下で若手の臨床・研究指導を担当する機会も得ました。医学部が新設された現職では、学部教育の他、若手医師やコメディカルの教育を通じ、有効性と安全性を最大限に高めた薬物療法や支持療法の普及と臨床開発、そしてがん診療の均てん化に貢献してまいります。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



池田 英二 博士
(平成8年卒業)

福井県立大学看護福祉学部教授に就任

医師とは違う立場で 医療に貢献する 人材育成に努める

平成30年4月1日付で、福井県立大学看護福祉学部教授に就任いたしました。私は平成8年に卒業し、大学院では核医学教室(利波紀久名誉教授)にてRIセンターの森厚文先生(現名誉教授)のご指導の下、アルツハイマー型認知症の早期診断に向けた β アミロイドの画像化の基礎研究をしておりました。その後、東京都の公衆衛生の現場を経て、これからはメンタルヘルスがさらに重要になると実感、横浜市立大学の精神医学教室(平安良雄名誉教授)の門を叩きました。横浜市立大学では、精神科救急病院や依存症専門病院など、どちらかという当時あまり精神科医には人気のない病院に派遣されました。患者さんやご家族からいきなり罵倒されることもありましたが、

が、かなり勉強になりました。また、このとき、核医学教室で学んだ手法を活かし、認知症と脳機能の関連や労働者の休職に関する研究を行いました。

精神保健指定医を取得したのは、富山県庁で医療政策に携わっていましたが、再び研究をしたくなり、富山大学神経精神医学教室(鈴木道雄教授)にお世話になりました。その後は青少年のメンタルヘルスに興味を湧き、神戸大学保健管理センター、埼玉大学教育学部、椋山女学園大学人間関係学部心理学科などで研究、教育に従事して参りました。

福井県立大学看護福祉学部は、看護師、社会福祉士、精神保健福祉士の養成が使命でありますので、医師とはまた違う立場で医療に貢献できる人材の育成に努める所存です。幸い、福井には金沢大学十全同窓会の先生方がたくさんいらっしゃいますので、心強く思っております。今後とも、先生方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成30年度 十全同窓会総会開催

日時／平成30年7月7日(土)

場所／医学部記念館

記録的な大雨の中での開催

平成30年度の十全同窓会総会が、去る7月7日(土)午前9時より、医学部記念館において、中村 信一会長の開会の辞で開始された。前日から大雨警報が発表され西日本から東日本にかけて広い範囲で記録的な大雨の中での開催であった。平成29年7月1日から30年6月30日までに逝去された物故会員(次頁一覧)に黙祷を捧げた後、議事に入った。

まず、大井 章史理事長より平成29年度の会務報告が行われた。平成29年3月卒業生は116名であったこと、17支部の総会に会長・理事長・理事が出席したこと、現在会員総数(14,614人)などが報告された。次に、和田隆志医学系長・医学類長から、医学類の現状、山岸正和教授、横田崇教授の退職、解剖学第一 西山正章教授の新任が報告された。堀 修大学院医薬保健学総合研究科長より、大学院管理・運営体制、大学院教育の現状の報告、また博士課程文科省プログラムの多様な新ニーズに対応する「がん専門医療人材(がんプロフェSSIONナル)」養成プランの説明が

された。「日露をつなぐ未来共創リーダー育成プログラム」(平成29年度大学教育再生戦略推進費「大学の世界展開力強化事業」)において、「先制医療交流プログラム」を実施し、サンクトペテルブルク大学、カザン連邦大学、クラスノヤルスク医科大学及び極東連邦大学の4大学から10名の大学院学生を受入れ、ラボローテーションや口頭発表等を行った旨報告された。市村宏大学院先進予防医学研究科長より、「大学院先進予防医学研究科」の下に金沢大学・千葉大学・長崎大学の3大学により設置された「先進予防医学共同専攻(共同大学院)」における金沢大学の役割を説明された。報告に続き第16回高安賞の贈呈が行われた。材木義隆氏(細胞移植学)に最優秀論文賞、村中勇人氏(がん幹細胞学)、下島正也氏(臓器機能制御学)には優秀論文賞が授与された。

西日本を中心とした豪雨の影響を受け、交通機関の状況もままならない中ご参席された7支部の代表が紹介された後、議事審議に移り大井理事長から平成29年度会計決算報告、高櫻英輔監事より監査報告がされ承認された。また平成30年度事業計画及び予算(案)も説明の後承認された。役員改選では、副会長に山本健先生、理事長には土屋弘行先生、会計理事には中村裕之先生が新任された。

議案審議について、学生課外活動支援と

して、白山診療班、立山診療班、ACLS金沢、医学展実行委員会に支援金が贈呈された。

本年は名簿改訂年であったが、3年毎より5年毎へと変更することと会長より説明があった。

就任記念講演と懇親会

総会後には教授就任記念講演が、法医学塚 正彦教授から「法医学における死因究明と予防医学」、血管分子生物学 山本 靖彦教授から「グリケーションとその生体応答系研究の潮流と展望」、免疫学 華山力成教授から「自己炎症疾患の発症機序とエクソソームの役割」、細菌学 藤永由佳子教授から「細菌毒素の巧妙な体内侵入機構から学ぶ」と題して行われ、参加者一同、若い先生方のパワフルで興味深い講演に魅了された。講演終了後、2階ラウンジにて懇親会が行われた。中村会長の挨拶、山梨支部長の田邊譲二先生のご発声による乾杯の後、各支部代表ご挨拶・近況報告をいただき、和やかな進行のうち、副会長に新任された山本健先生による中締め挨拶後盛會裏に散会となった。

(大井 章史：記)



物 故 会 員

(平成29年7月1日～平成30年6月30日の連絡)

坪川 信行	昭和18年専卒業
中村 道直	昭和18年専卒業
沖野栄二郎	昭和19年専卒業
呉 俊雄	昭和19年専卒業
岩田 嘉幸	昭和20年卒業
中込 弘	昭和20年卒業
増山 隆雄	昭和20年卒業
小林 喜順	昭和20年専卒業
谷口 馨	昭和20年専卒業
中村 覚	昭和20年専卒業
青木富士弥	昭和21年卒業
倉田 自章	昭和21年卒業
大澤 眞夫	昭和22年卒業
熊野 宏	昭和22年卒業
毛利 正	昭和22年卒業
釜田 孝雄	昭和23年専卒業
倉田 稔	昭和23年専卒業
蜂谷 徹	昭和24年卒業
渡邊 敏夫	昭和24年卒業
市川 俊夫	昭和24年専卒業
卜部 济	昭和24年専卒業
神田 啓道	昭和24年専卒業
野田 良	昭和24年専卒業
若林 緑	昭和24年専卒業
伊藤 喜祐	昭和25年専卒業
白崎 幸雄	昭和25年専卒業
瀬野 孝	昭和25年専卒業
辻口 昇	昭和25年専卒業

不室 徳治	昭和25年専卒業
宮川 史朗	昭和25年専卒業
赤崎 京一	昭和26年卒業
井上 篤	昭和26年卒業
今泉 厚二	昭和26年卒業
海野 信義	昭和26年卒業
中川幾一郎	昭和26年卒業
河合 嘉穂	昭和26年専卒業
島田昭三郎	昭和27年卒業
道下 忠藏	昭和27年卒業
青木 辰夫	昭和28年卒業
中村 五暁	昭和28年卒業
古野美喜夫	昭和28年卒業
守内 昭夫	昭和28年卒業
大門 弘文	昭和29年卒業
荒木 欽平	昭和30年卒業
田中 孝	昭和30年卒業
山本 浩	昭和30年卒業
山城 則亮	昭和31年卒業
猪原 駿一	昭和32年卒業
酒井 章	昭和32年卒業
上原 時雄	昭和34年卒業
藪並 進一	昭和34年卒業
吉倉 昌弘	昭和34年卒業
高山 茂	昭和35年卒業
畑尾 正彦	昭和35年卒業
浅妻 茂美	昭和36年卒業
浜辺 昇	昭和36年卒業
岩崎 英達	昭和37年卒業
河村 洋一	昭和37年卒業
林 信治	昭和37年卒業
石川 光賢	昭和38年卒業

中川 正昭	昭和38年卒業
山崎義亀與	昭和38年卒業
井上 雄元	昭和39年卒業
倉知 圓	昭和41年卒業
東福 要平	昭和41年卒業
俵矢 勝二	昭和43年卒業
富田 信昭	昭和43年卒業
川口 光平	昭和47年卒業
中沢 信之	昭和47年卒業
中西 拓郎	昭和50年卒業
西郡 修道	昭和50年卒業
矢島 謙志	昭和50年卒業
荒井 正雄	昭和51年卒業
伊藤 廣	昭和51年卒業
正印 克夫	昭和55年卒業
中沢 健	昭和57年卒業
川村 哲朗	昭和63年卒業
上野 聖満	Ⅱ 会員
大庭宗三郎	Ⅱ 会員
岡部 三郎	Ⅱ 会員
桐沢 奨二	Ⅱ 会員
古村 恒久	Ⅱ 会員
中村 保雄	Ⅱ 会員
春木 敏男	Ⅱ 会員
東野 繁子	Ⅱ 会員
日原 良二	Ⅱ 会員
藤井 一郎	Ⅱ 会員
宮本 乙男	Ⅱ 会員
山瀬 勇	Ⅱ 会員
山本 泰	Ⅱ 会員
小田 真衣	準会員
谷口 昂	特別会員

(敬称略)

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
会員のご不幸は当会にご一報をお願い
いたします。

総 会 記 事

平成29年度決算報告ならびに平成30年度予算について

平成29年度決算

表1に一般会計の決算書を示します。会費収入は例年の通り減少傾向でした。支出では、会報宝町キャンパス竣工特集号別冊、会員情報管理システム化にかかる費用を基金から繰り入れて充てました。各支部総会への参加、ならびに各支部から本学総会への参加が増加しております。補助費は記念館整備が必要とされなかった分、減額となりました。

全体としては会費収入の激減で、基金からの繰り入れが増額しました。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は資産運用で得た利息のみです。また、一般会計への繰り入れ額は4,000,000円でした。名簿作成会計では免除会員の先生方からの協賛が収入となっています。また高柳奨学金は、奨学生1名の採用があり、無利子での貸与を2名に実行しました(表2～5参照)。

平成30年度予算

会費収入は努力目標を計上しました。会費納入率は50%に満たない状態が持続しており、目標達成のためのさらなる努力が必要とされています。特に、新入会員の会費納入率低下は、長期低落傾向を示しています(図)。学類在籍中から働きかけることにより帰属意識を高め、新入会員の会費納入率を増加させることが、最大の課題であると考えています。

支出は学生課外活動や図書館などの課外活動・整備補助は例年通り、固着化した予算をニーズによって優先順位を決定し実行することとしました。本年は名簿改訂該当年でしたが、5年毎に変更することとしました。高柳奨学金は、奨学生1名の採用予定です(表6～8参照)。

(会計担当 谷内江昭宏：記)

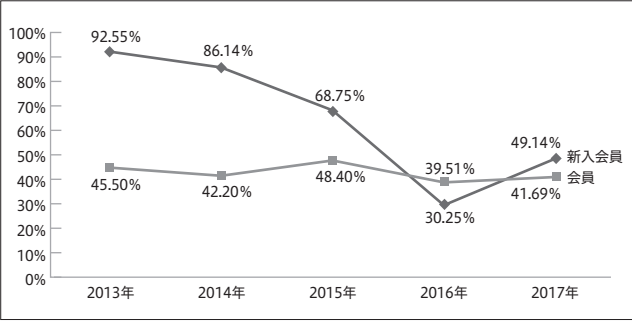
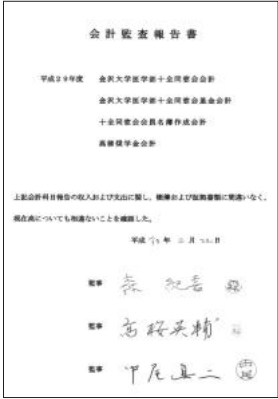


図 過去5年間の会費納入率(新入会員・会員)の推移



会計監査報告書

表1 平成29年度決算書

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

収 入				支 出			
科 目	予 算(円)	決 算(円)	摘 要	科 目	予 算(円)	決 算(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	980,732	980,732		事業費	8,193,080	8,144,934	会報第165, 166, 167号・総会チラシ印刷製本代 2,999,969 会報特集号 1,674,000 会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,638,872 発送用封筒代・会費払い込み用紙 251,260 アカンサス印刷代 44,100 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 SP研究会支援 50,000 学生課外活動支援 (立山診療班) 100,000 (白山診療班) 100,000 新入会員卒業祝(印鑑付ペン) @2,268×116本 263,088 会員情報管理システムログイン情報通知諸経費 823,645 各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 1,096,680 総会、理事会、会報編集委員会、反省会 462,332 弔電・生花 37,944 記念館展示室整備 0 図書館医学類分館図書補填 200,000 西医体補助 200,000 学生課外活動補助(ACLS) 200,000 医学展補助 50,000 「大学院医学系研究科」進学説明会補助金 20,000 会費払込料金、プリンター修理等一式・感光体・トナー 936,740 通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 人件費 2,500,000 11件 550,000 封入作業・アルバイト等
会費収入	10,525,000	11,998,000	平成29年度会費 4,000円×1,530人 過年度分 606人 平成30年度以降 75人 準会員会費 6,000円×91人 5,000円×1人	旅 費	1,500,000	1,096,680	
基金より繰入	4,000,000	4,000,000		会議費	480,000	462,332	
				慶弔費	100,000	37,944	
				補助費	670,000	670,000	
				事務費	3,500,000	3,436,740	
				支部への補助費	600,000	550,000	
				予備費	462,652	268,599	
				繰越金		2,311,503	
計	15,505,732	16,978,732		計	15,505,732	16,978,732	

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金利 息	50,998,898 131,370	利付国債(第118回・第336回)	一般会計へ繰り込み	4,000,000	会報宝町キャンパス竣工特集号特集号 会員情報変更サイトログイン情報発送関係
計	51,130,268		計	4,000,000	残高 47,130,268

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
繰越金 協賛金	444,413 10,000	免除会員協力@5,000×2件	事務費	21,362	払込手数料、郵便料
計	454,413		計	21,362	残高 433,051

自 平成29年 1月 1日
至 平成29年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金 利 息	5,215,646 636	定期預金利息	奨学金 奨学金貸与(無利子) 事務費	75,000 225,000 600,000 432	H28年度 奨学生1名(25,000円/1 ヶ月) 平成29年1月～平成29年3月分 H29年度 奨学生1名(25,000円/1 ヶ月) 平成29年4月～平成29年12月分 奨学金貸与(無利子) 2名分 残高証明発行手数料
計	5,216,282		計	900,432	残高 4,315,850

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	金 額(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金	2,311,503		事業費	6,363,088	会報・総会チラシ印刷製本代 2,850,000
会費収入	11,965,000	平成30年度会費 4,000円×1500人 6,000,000 過年度分 5,000,000 平成31年度以降 50人 400,000 準会員会費 6,000円×90人 540,000 5,000円×5人 25,000			会報・アカンサス発送代・理事会関係発送 1,700,000 発送用封筒代・会費払い込み用紙 300,000 会報発送封入作業 年3回 180,000 アカンサス印刷代 50,000 関連病院長会議・関連病院渉外費 200,000 新入会員卒業祝(印鑑付ペン) @2,268×116本 263,088 十全同窓会ホームページ更新作業 700,000 ホームページ会員情報サイト管理 120,000
			旅 費	1,500,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費 会報取材旅費等
			会議費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会、反省会
			慶弔費	100,000	弔電・生花
			補助費	720,000	記念館展示室整備 100,000 図書館医学部分館図書補填 200,000 学生課外活動補助 医学展 50,000 西医体 100,000 白山診療班 100,000 立山診療班 100,000 ACLS 50,000 金沢大学大学院医薬保健総合研究科(修士課程及び医学博士課程)・先進予防医学研究科 進学説明会補助 20,000
			事務費	3,600,000	会費払込料金、プリンター修理等一式・感光体・トナー、通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料 1,100,000 人件費 2,500,000
			支部への補助費	600,000	600,000
			予備費	913,415	
計	14,276,503		計	14,276,503	

表 6 平成30年度 十全同窓会基金会計 予算(案)

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金 利 息	47,130,268 131,370	利付国債			
計	47,261,638		計	0	残高 47,261,638

表 7 平成30年度 十全同窓会名簿作成会計 予算(案)

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
繰越金	433,051		事務費	20,000	払込手数料、郵便料
計	433,051		計	20,000	残高 413,051

表 8 平成30年度 高柳奨学会会計 予算(案)

自 平成30年 1月 1日
至 平成30年12月31日

収 入			支 出		
科 目	予 算(円)	摘 要	科 目	金 額(円)	摘 要(円)
前年度繰越金 利 息	4,315,850 636	定期預金利息	奨学金	75,000 225,000	H29年度奨学生 1名 \25,000×3カ月(1月-3月) H30年度奨学生 1名 \25,000×9カ月(4月-12月)
			事務費	432	残高証明発行手数料
計	4,315,214		計	300,432	残高 4,014,782

お見舞い

平成30年7月豪雨(西日本豪雨)および
平成30年北海道胆振東部地震により
被災された皆様ならびにそのご家族の皆様に
心よりお見舞い申し上げます。

一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

金沢大学医学部十全同窓会

教授就任講演

法医学における死因究明と 予防医学

法医学 塚 正彦

法医学による死因究明

法医学は解剖学、生理学および内科学等と比較すれば、新しい学問で、基礎医学の中では社会医学的側面を有し、さらに死後診察という個人を対象とした実務を有する点で異彩を放つ学問といえましょう。その一方で、法医学は結果をみる学問と捉えられがちです。金沢大学法医学教室は、大正13年に初代専任教授古畑種基博士の着任から百年近くが経過しています。その間、医学および医療と法・社会環境の接点で生じる学際的諸問題を幅広く取り扱ううえで、時代の変化に応じた社会の要請に答えてきたことは、即ち法医実務の変遷があったことを意味しています。私は、医師となり金沢で大学院生の生活を始め、米国スクリプス研究所勤務をはさんで、大学の専門分野は病理学から法医学に変わりましたが、一貫して「血管壁脆弱性」をキーワードに研究を続けてきました。専門を変える際には、帰国の年、平成18年から始まった厚生労働省の医療事故に対応するモデル事業で、血管病理を専門とする私に、法医学の立場からの参加を打診されたことが契機となりました。私が大学院で、血管研究を始めた頃、法医学領域で取り扱う異状死体数はすでに増加する傾向にありましたが、それは私が法医学教授に着任するまでの25年間継続していました。その間新たな問題提起となり、法医実務の需要増加につながったのは、相撲部屋といった閉ざされた環境におけるリンチ事件、練炭や睡眠薬を使った連続殺人事件という当時の死因究明の盲点を突く諸事例でした。警察庁が発表した過去30年間で内因死として誤って判断した後に、犯行の自供などにより覆った殺人事件が複数存在するのですが、逆に、犯罪死体の可能性があるために司法解剖を行い、結果的に病死である事案が半数以上を占める

という現実があります。そこでも、一旦血管病変による突然死が多いとされると安易に診断名が乱発される虞れがあります。つまり、内因死、外因死いずれの場合にも死因判定には然るべきエビデンスのある法医学が求められています。

予防医学的対策

発症後24時間以内に受診することなく死亡したとき「突然死」と表現され、継続して診察されている病気が原因であると判明したもの以外は、異状死体として届出されることが多いのですが、解剖による死因検索後、その疾患別の内訳は、半数近くを虚血性心疾患が占め大動脈疾患、脳血管障害を含めて三分の二という高い割合を示しています。血管病変の重要な基礎的变化として動脈粥状硬化があります。解剖一体の中に、進行度の異なる、複数の粥腫性変化ないし狭義の粥腫いわゆるプラークが認められます。私は、一定の大きさ以上のプラークを実体顕微鏡下で切り分けて得られた組織培養上清から、プラーク内の部位別に、基質分解活性の局在様式が異なることを学位取得時に明らかにしました。粥腫性病変の進行に伴う組織脆弱化をもたらす主体は、マトリックス・メタロプロテアーゼ（以下MMP）と考えています。MMP-2がゼラチナーゼA、MMP-9がゼラチナーゼBに相当します。非活性型のゼラチナーゼAおよびBは大略ゼラチン分解活性の高い部分に認められました。「血管組織内、細胞内外でのプロテアーゼ活性の局在はどのようなか。」これが大学院時代に抱いた疑問です。その疑問をもとに、組織脆弱性評価の方法として、新規技術フィルム・イン・サイトウ・ザイモグラフィ（FIZ）を企業と共同開発しました。この方法を用いれば免疫二重染色も可能で、形態学者

としての自分の強みを活かすことができません。この技術を用いて、①血管新生の作用を有するヘパリン親和性増殖因子に属するサイトカイン、プライオトロフィンのノックアウトマウスの形質発現と②血管プラークの破綻への血小板を含む血栓の関与を動物実験で調べることができました。法医解剖資料を用いて突然死の病態を解析する研究指向を通して、法医学は「結果をみる学問」から「予防医学」への移行を可能にすると考えます。また、最近10数年の大規模自然災害時にも、社会全体からの法医実務の要請がありました。一つ目は平成19年能登半島地震のときで、地震発生後まもなく立ち上がった金沢大学「学術調査部会」を介して、石川県警察本部の協力を得て、検視記録を解析しました。二つ目は平成23年の東日本大震災の際、日本法医学会を介して、東北の各県からの要請を受けて検死業務を行ったものです。これらの教訓を活かすべく、今後自然災害等への予防医学的対策にも貢献が求められています。司法解剖、社会貢献に予防医学的側面を加えることで、現代の法医実務は社会の恒常性に寄与するといえます。法医学自体が比較的新しい学問であるだけでなく、当教室は若い研究室として生まれ変わろうとしております。未来の死因究明に関わる人材の育成も重要な課題です。これまでに金沢海上保安部から7名を、専修生として受け入れてきました。石川県は地理的に長い水際を有するために、地の利を活かしたテーマとして、プランクトン検査および個人識別に関する研究を継続的に行ってきました。血管壁脆弱性研究を支える大学院生にも恵まれ、これから更に精一杯の努力を誓うものであります。今後ともご指導とご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

グリケーションと

その生体応答系研究の潮流と展望

血管分子生物学 山本 靖彦

老化とグリケーション

世界的に急速な高齢化を迎える中、健康寿命の延伸に向け、分子生物学・分子遺伝学・生化学的研究アプローチを基盤とした老化の制御メカニズムの解明が必要となってきた。老化とは、生物の機能が時間依存的に障害されることであり、広範囲にわたる細胞の構造・機能・生化学反応と代謝の変化の結果ととらえることができ、超高齢化社会を迎えた現代において、老化研究はますます重要な研究領域となってきた。さらに、老化は慢性的に蓄積する非酵素的な化学修飾反応とも捉えられ、生体分子すべてに傷害や損傷を与える「錆びや腐食」のようなものとしても位置付けられる。グリケーションは、そのような修飾反応の代表であり、生命活動を行う限り避けては通れないものである。つまり言い換えると、生体内に存在するほとんどすべての生体高分子は、生命活動に伴って非酵素的なグリケーション(糖化反応)を受けることとなる。当初、グリケーションは、グルコースに代表される還元糖のカルボニル基とタンパク質のアミノ基が非酵素的に反応し、最終糖化産物(advanced glycation end-products, AGE)の生成に至るまでのことを指していた。しかし、現在ではより広い範疇で使用されて

いる。病態の一例で、例えば糖尿病のような慢性的な高血糖状態では、生体内のあらゆるところでグリケーションが亢進し、その最終産物であるAGEが蓄積することで、粥状硬化や糖尿病血管障害の発症、そして発がんにも繋がり、平均寿命の短縮が生じると考えられている。現代の高齢化社会においては、年齢を重ねるとともにグリケーションとその最終産物AGEの蓄積が生じ、加齢関連疾患の発症に繋がると考えられている。

細胞内グリケーションとその消去系の最新の知見

個体において生命活動を行うすべての細胞は解糖系を利用する。細胞内では、細胞外から取り込んだグルコースを使ってエネルギー産生が行われている。解糖系においてグルコース代謝の中間産物であるグリセルアルデヒド-3-リン酸を経由して、常に数%副産物として非常に反応性の高い α -ジカルボニル化合物のメチルグリリオキサルが産生され続けている。これらグリセルアルデヒド-3-リン酸とメチルグリリオキサルは、グルコース以上に強力なグリケーション作用を有しており、細胞内は常にグリケーションに曝されていることになる。しかし、特にグリケーシ

ン作用が強く細胞毒性を有するメチルグリリオキサルは、通常、glyoxalase systemにより分解消去されており、その鍵を握る酵素がglyoxalase 1(GLO1)である。さまざまな病態形成において、メチルグリリオキサル、GLO1の関与が知られてきている。例えば、糖尿病状態では、メチルグリリオキサル産生が亢進、GLO1活性は低下し、これにより体内でのAGEの蓄積は増加し、糖尿病合併症が増悪すると考えられている。また、統合失調症患者の一部にGLO1活性が欠失している症例があることが報告され、それとは逆に、グルコースを大量に取り込み解糖系が亢進しているような大腸がん、肺がん、前立腺がんなどの多くのがんでは共通して、がん細胞自身の生存のためにGLO1は高発現している。また、神経変性疾患(アルツハイマー病やパーキンソン病)、不安障害およびてんかんなどさまざまな疾患との関連も報告されている。

今後の展望

細胞外に存在するグリケーション最終産物のAGEは、細胞膜上にあるAGE受容体(receptor for AGE, RAGE)に認識され、さまざまな細胞応答やそれに引き続く病態形成を引き起こすことになる。RAGEの機能も大変重要である。

このようなグリケーションを基軸とした老化研究を推進し、活性化することは、医学にとどまらず幅広い領域で、今後重要になってくるものと考えられる。まだまだ未解決なグリケーションとその生体応答系の研究を推進し、老化の制御へと繋げていき、老化基礎研究にとどまらず、診断予知マーカーや予防・治療法の開発や創薬など、応用研究へと発展させていくことが必要である(図)。可能であれば、今後、金沢大学がそのような研究のハブとしての役割を担い、優秀な人材の育成にも貢献できればと考えている。今後ともご指導の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

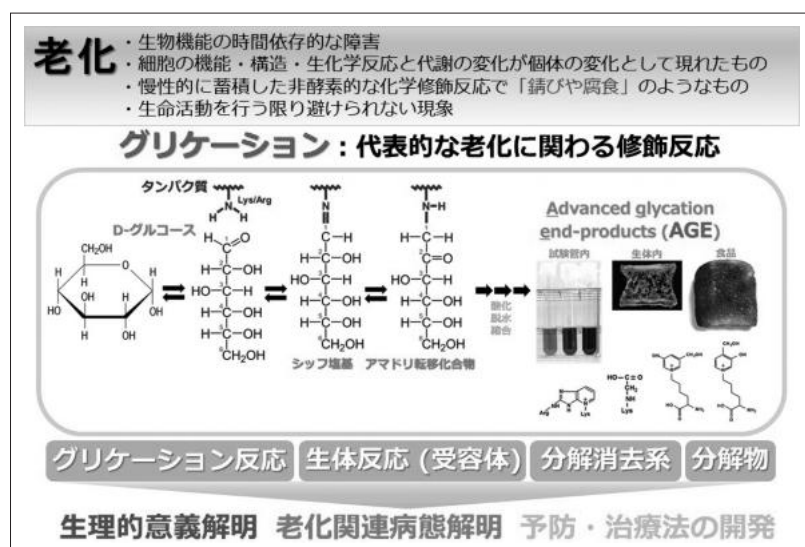


図 グリケーションとその生体反応系の研究

自己炎症疾患の発症機序と エクソソームの役割

免疫学 華山 力成

自己炎症疾患という疾患概念

近年、マクロファージや好中球などの貪食細胞による自然免疫機構の研究進展にともない、免疫の異常による疾患は、T細胞やB細胞など獲得免疫の異常による従来の自己免疫疾患だけではなく、自然免疫の異常による自己炎症疾患という新たな観点から疾患概念が大きく再定義されてきております。しかし、その発症機序の多くは未だに解明されておられません。マクロファージは免疫の要となる細胞で、病原体や死細胞、自己成分などを細胞内に取り込みリソソーム内の消化酵素によって分解・除去します(図)。その後のマクロファージの応答として、これまでは免疫活性物質や抗原提示による獲得免疫の活性化機構が盛んに研究されてきました。一方、マクロファージが異常に活性化すると、正常な自己細胞を生きたまま細胞内に取り込んだり(血球貪食)、リソソーム内の消化酵素を細胞外へと放出したり(他者融解)することにより、直接的に組織傷害を引き起こします。さらに、このようなマクロファージの応答を制御する新たな因子として細胞外小胞エクソソームの役割が注目されています。そこで本日は、私たちが自己炎症疾患の解明に向け取り組んでいる、マクロファージによる血球貪食と他者融解を介した組織傷害、そしてエクソソームの研究をご紹介します。

血球貪食のメカニズム

私達の体内では、1日に数千億もの細胞が死に、新しい細胞に置き換わります。細胞は死滅すると自分を食べてくださいという“eat-me”シグナルを細胞表面に提示します。私は、マクロファージから分泌されるMFG-E8が、死細胞上の“eat-me”シグナルと結合するとともに、マクロファージ上の受容体とも結合して、マクロファージにこの細胞を貪食せよというシグナルを伝えることを示しました(Nature. 2002年)。MFG-E8の欠損により死細胞が除去されないと、死細胞

の膜に穴があき、死細胞から自己抗原が漏れでて慢性炎症を引き起こします。その結果、全身性エリテマトーデス(SLE)様の自己免疫疾患の発症を引き起こすことを明らかにしてきました(Science. 2004年)。

一方、特別な状況下でマクロファージは自己の血球を生きたまま貪食するようになります。これは血球貪食症候群と呼ばれており、過度の炎症によって引き起こされ、血球が減少し死に至る難治性の疾患です。ところが、過度の炎症がマクロファージをどのように変化させることによって血球貪食を引き起こすのかは解明されていません。そこで私は、マクロファージが生きた細胞を貪食する現象を培養細胞の実験系で再現し、この実験系を用いて血球貪食を担う分子の同定を試みました。その結果、過度の炎症刺激によってマクロファージの細胞表面にさまざまな受容体分子の発現が誘導され、マクロファージによる血球の取り込みを促進することを見出しました(EBioMedicine. 2017)。今後はこれらの受容体分子の解析を更に進め、血球貪食症候群の治療法の開発を目指していきます。

他者融解と血管炎

一方、他者融解は、活性化したマクロファージや好中球がリソソーム内の消化酵素を細胞外へと放出し、周囲の細胞に融解を引き起こす機構として古くから知られていますが、その制御機構や生理的・病理的意義はほとんど解明されておられません。最近私は、この過程を制御する分子の同定に成功しました。この分子はマクロファージや好中球のリソソーム膜に局在しており、カルシウム依存的に細胞膜の内側と結合することによって、リソソームと細胞膜の融合を促進することが明らかにしました(論文改訂中)。その結果、リソソーム酵素が細胞外へと放出され、

マクロファージや好中球による組織傷害を引き起こします。私はこの機構が特に、高安動脈炎の発症に関与している可能性を見出しており、高安右人先生によって金沢大学で発見された、この世界的に有名な疾患の病態発症機序の解明とその制御を目指してゆきたいと思っております。

新たな細胞間情報伝達機構・ エクソソーム

エクソソームは、さまざまな細胞から放出される直径30-100nm程の小さな膜小胞です。エクソソームには分泌細胞由来のさまざまな蛋白質やRNAが含まれており、細胞間の情報伝達に関与する新たな因子として、近年注目されています。免疫細胞が放出するエクソソームは、細胞間での抗原情報の交換や、免疫応答を制御すると考えられていますが、中でも私は、マクロファージの活性化を強く引き起こし、自己炎症の発症に関与する可能性を見出しております。エクソソームの研究は始まったばかりで、生理・病理的意義はほとんど解明されていません。今後、私はエクソソームの形成機構を明らかにし、それを亢進または阻害することによって、どのような生理・病理機能が引き起こされるのかを解明することを目指しております。これらの研究を通して、金沢大学の免疫学研究の発展に貢献してゆきたいと思っております。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後とも温かいご指導・ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

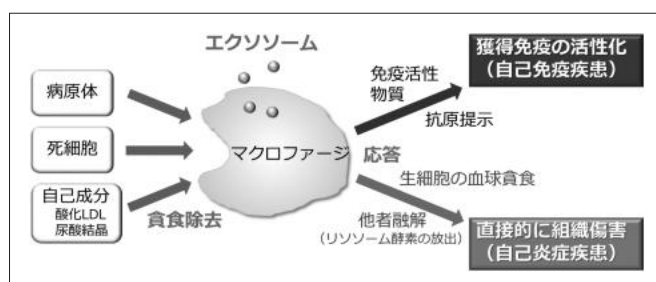


図 マクロファージによる自己炎症の発症機序とエクソソームによるその制御

細菌毒素の巧妙な 体内侵入機構から学ぶ

細菌学 藤永由佳子

当研究室では、高病原性細菌であるボツリヌス菌を主な研究対象としています。

1. ボツリヌス菌の病原性についての基礎的研究

ボツリヌス菌はボツリヌス神経毒素複合体を産生することによりボツリヌス症を引き起こします。本症にはいくつかの病型がありますが、主な病型として食餌性ボツリヌス症と乳児ボツリヌス症があります。食餌性ボツリヌス症は経口摂取されたボツリヌス神経毒素複合体が腸管から吸収されて、血中に移行し、末梢神経に到達することで発症します。本毒素が腸管から血中に移行する機構は不明でしたが、我々は本毒素複合体が腸管吸収過程において発揮するユニークな機能および本毒素複合体が腸管から体内へ侵入する経路を解明してきました。

乳児ボツリヌス症は、経口摂取されたボツリヌス菌芽胞が腸管内で発芽・増殖し、神経毒素複合体を産生することによって引き起こされます。本病型は、軽い便秘傾向から全身の筋力低下、呼吸筋麻痺による突然死など症

状に幅があることが知られており、乳児突然死症候群(SIDS)との関連も指摘されています。本菌芽胞は環境中(蜂蜜など)に存在し、経口摂取する機会が少なくないと考えられますが、乳児以外における本病型(腸管ボツリヌス症)は稀であります。乳児では腸内細菌叢が未発達であるため本菌芽胞の腸管内での発芽・増殖・毒素産生が起こりやすいと考えられていますが、具体的に関与する腸内細菌およびその機構は不明です。当研究室では本菌芽胞の発芽・増殖を抑制する腸内環境因子について解析を進めております。

2. ボツリヌス症の新規治療薬の開発

ボツリヌス症の治療薬としては現在ウマ抗毒素製剤しかありません。我々は国立感染症研究所などとの連携により有効で安全な抗毒素ヒト型モノクローナル抗体製剤の開発を行っております。

3. ユニークな生物活性を有する細菌由来物質を応用する研究

我々は本毒素の無毒成分を粘膜ワクチンの輸送体として活用できることを見出しております。また無毒成分の別の機能としてE-cadherinに特異的に結合してその機能を阻害する活性を発見しました。本機能は再生医療のさまざまな局面で非常に有用な物質として利用できるとがわかってきました。製薬企業および大学などと連携してこれらの研究を行っております。

最後に

本研究室には、およそ60年にわたるクロストリジウム属菌の素晴らしい研究の蓄積があります。私が長年研究対象にしてきたボツリヌス菌も同じクロストリジウム属菌です。本研究室の研究を大切に受け継ぎ、この先も発展するように努力させて頂くことに大きな喜びを感じております。今後ともご指導と共同研究を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ボツリヌス菌とボツリヌス神経毒素複合体

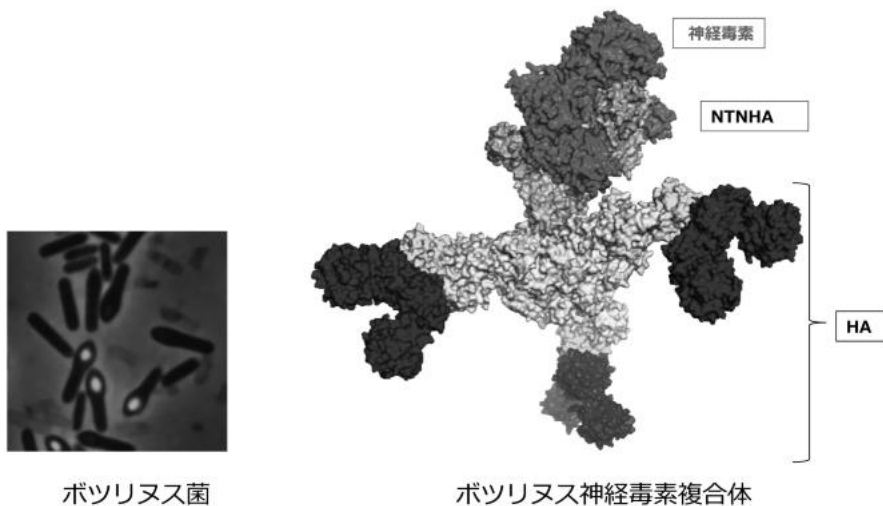


図 ボツリヌス菌とボツリヌス神経毒素複合体

無類の勉強家、 寝食を忘れての診療は 伝統的精神として 医局に受け継がれる

金沢大学医薬保健研究域医学系小児科学第六代教授谷口 昂先生は平成30年4月8日、享年87歳でご逝去されました。

谷口先生は、昭和5年に京都府に生まれ、昭和25年第三高等学校理科を卒業、その後昭和29年に京都大学医学部を卒業されました。愛媛県立中央病院小児科勤務などを経て、昭和34年に金沢大学医学部小児科助手として着任されました。前年に着任した第四代佐川一郎教授に請われての異動でした。その後は一貫して金沢大学医学部で小児科学の臨床と基礎研究に従事され、昭和39年に講師、45年に助教授に昇任されています。そして昭和53年には第五代教授中島博徳先生の後任として教授に就任されました。

谷口先生が誰よりも臨床能力に優れていることは良く知られていました。助手、講師時代は乳児栄養、ムコ多糖代謝異常症の研究を進める傍ら、病棟医長として歴代の教室員の臨床研修を指導し、その寝食を忘れての診療は医局員に多大な感銘を与え、その後の金沢大学小児科医局の伝統的精神として受け継がれることになりました。無類の勉強家であり、臨床診断、検査、治療に関する適切かつ鋭い指摘に、教室員は教授回診の度に畏敬の念を新たにしました。

谷口先生は当時5、6年生に対して行われていた15コマの臨床講義を、医局員に対する講義と考えておられました。習慣となっていた黒板ふきなどは医局員にやらせず、一緒に席に座って講義を聴くことを望まれました。その渾身の講義の記録である講義プリントは自作のものであり、今でも全てを保存している同門の小児科医が多くあることを知り、深い感慨を覚えます。

また教室を主宰されてからは故宮脇利男富山大学名誉教授(小児科学)らを指導して、免疫学を金沢大学小児科の研究の柱に据え、乳幼児期の発達免疫学の研究に力を尽くされました。当初は液性免疫の研究からの出発でし

たが、単クローン抗体やセル・ソーターの登場と共にこれらを駆使して新しい研究を次々と展開、新生児期から成人期にわたるリンパ球分化成熟過程を解明し、国際的に高い評価を得ました。国内でも金沢大学小児科の免疫学研究は高く評価され、谷口先生は厚生省原発性免疫不全症候群調査研究班の班長を務められました。さらにEBウイルス感染症の多様性とEBV関連疾患の病態に関する研究、リンパ球のアポトーシス異常を特徴とする国内初のFas異常症の発見などの研究は、その後の金沢大学小児科の研究の発展につながる基盤となりました。これらの業績に対して、平成2年には第44回北國文化賞が授与されています。多くの優秀な後進を育て、平成8年に定年退職されました。

谷口先生の慧眼と博識は他大学の方々にも良く知られていましたが、教室員のことを考えてか、学会の公的業務や学術集会の主催は避けてこられたような記憶があります。そのような中で主催された以下の学会は特別の重みがありました。

昭和62年

第17回日本免疫学会総会・学術集会

(副会長)

平成1年

第17回日本小児科学会セミナー(会長)

第25回中部日本小児科学会(会長)

平成3年

第23回日本小児感染症学会(会長)

平成7年

第31回中部日本小児科学会(会長)

いずれも思い出に残る素晴らしい学会でした。

金沢大学を退職された後は、小松市瀬戸にある重症心身障害児施設「小松療育園」の園長となられ、お亡くなりになる直前まで車を運転して毎日通われていました。教授在職中の「谷口イズム」は新たな職場でも存分に発揮され、多くの職員を育て、励まし、また自ら率先して診療にあたっておられました。職場の方々や、子どもたち、ご家族に大変慕われ信頼されており、ご逝去を悼んで園の中にも追悼の場が設けられました。

谷口先生が教授に就任されてから、金沢大学小児科同門会誌が発刊されるようになりました。毎年の巻頭言には、教室員や同門の先生方の心に残る言葉がしばしば書かれていました。中でも私自身が心にとめて、自らの研



谷口 昂名誉教授

究を続ける上で大切な座右の銘にしていたのは、「Opportunityの神の後ろ頭は禿げている」と「Klein, aber mein」です。前者の意味は、稀有な患者さんに遭遇して慌てて付け焼き刃で勉強しても、解析や分析の機会はあるという間に失われる。いつどのような患者さんと遭遇してもすぐに対応可能のように知識を蓄え、技術を磨いて準備しておきなさいということかと思います。そして、Klein, aber mein. 人真似ではなく、小さくとも自分のものと言えるオリジナルな仕事をしなさいとの教えだと思います。この言葉は、追悼集のタイトルとしました。

谷口先生が大切にされたのは、地位や名誉ではなく、患者さんに真正面から向かい、患者さんから与えられている(はずの)メッセージを学問の言葉で表現することでした。そして、何より、そのような力と気概を持つ人材を育てることに力を注がれました。私生活のほとんどを犠牲にされ、お盆の1、2日、丹後半島の実家に帰省される以外は全てを大学での生活に費やされたことはほとんど伝説となっています。私たち残されたものは、このような谷口先生の遺志を繋ぎ、金沢大学において一流の臨床・教育・研究の環境を発展させるよう努力を続けたいと願っています。

谷口先生の多大なご業績に敬意を表し、長きにわたるご指導に感謝すると共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

第1回鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会

日時／平成30年6月8日(金)

場所／石川県政記念しいのき迎賓館

鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞は、金沢大学の前身、第四高等学校に学んだ鈴木大拙と西田幾多郎にちなみ、本学医学部ご出身で高安賞と臼井国際医学奨学金の創設者でもある臼井 溢先生(昭和39年卒)のご篤志を原資として、平成29年6月に創設されました。その趣旨は、哲学・思想・宗教を中心とする分野で国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰し、当該分野の研究の一層の進展を促すとともに、次代を担う若手研究者に対して大きな学問的刺激を与え、国際貢献と学術研究のさらなる発展に資することにあります。

第1回受賞者には、ジラルル フレデリック ルネ ロペール(Girard Frédéric, René, Robert) フランス極東学院名誉教授が選ばれました。ジラルル先生は、鈴木大拙、西田幾多郎の両先達の思想に影響を受けた、ヨーロッパを代表する東洋文化の研究者です。日本の宗教と哲学思想に関する研究業績、日本と欧米の研究者の架け橋としての貢献が高く評価されました。

その授賞式および記念講演会が、本年6月8日、学内外から100名を超える参加者を迎え、石川県政記念しいのき迎賓館において開催されました。授賞式では、山崎光悦学長の挨拶とともにジラルル先生に盾、副賞、記念品が贈呈され、臼井先生から賞の創設とご寄附の経緯が説明されました。記念講演会では、

ジラルル先生が長年の研究と所感を約1時間半にわたり懇切丁寧に紹介されました。引き続き催された祝賀会では、賞の創設にご尽力いただいた山出 保前金沢市長や選考委員会の先生方のスピーチもあり、充実した交流・交歓の場となりました。

(横山 茂：記)



金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金のご紹介

本学医学部昭和39年卒業の臼井 溢先生(医療法人社団明徳会十全記念病院理事長)には、長年、医薬保健学総合研究科、先進予防学研究科、医学類で学ぶ学生たちが海外における諸活動や国内で医学研究を進める際の研究活動促進を行うために、多大なご支援をいただいています。金沢大学学生医学研究推進臼井奨学金はその目的達成のため、臼井先生からいただいたご厚志を基金として平成28年に設立されたものです。(本奨学金の詳細は、<http://www.med.kanazawa-u.ac.jp/students/doc/scholarship.pdf>をご覧ください。)

臼井先生の本学へ思いの大きさは、高安右人像建立を皮切りにこの奨学金や鈴木大拙－西田幾多郎記念金沢大学国際賞における先生

のご厚志からすでに十二分に理解できることかと思いますが、金沢大学創基150年にあわせて平成24年11月10日に宝町キャンパスで開催された高安賞創設10周年・臼井国際奨学金創設5周年記念シンポジウム(医薬保健学総合研究科・医薬保健研究域主催、十全同窓会後援。本シンポジウム開頭には臼井先生からご挨拶を頂戴しています。本会報第153号)にみられるごとく、多方面において多大なご支援をいただいています。臼井国際奨学金は、平成18年にインドシナ半島周辺国の本学医薬保健学総合研究域で学ぶ若手研究者支援を通じて、現地医学教育の推進、日本への理解・両国の良好な友好関係構築を目指すものです(平成30年度をもって終了)。

先生は病院を開設された静岡県にコメディ

カルを育成する学校がなかったことから、平成8年に青翔学園静岡医療科学専門学校を自ら創設され、在校生の奨学金・助成金を設定されています。また、浜松医科大学医学部生には国際サービスマンシップ留学経費支援を実施し、学生たちの海外交流をサポートされています。

先生のこれらの活動から、住民への奉仕という地域貢献から、国内のみならずグローバルに活躍できる人材の育成に至るまで、母校愛を超えた世界的な広い視野で医療・文化を俯瞰しておられる先生の思想を知ることができ、十全同窓会の同門として誇らしく思います。同窓生一同、臼井先生と志を共にして行動することが求められると感じます。

(絹谷 清剛：記)

受賞

第14回 金沢大学十全医学賞

松下 貴史

(平成11年卒業)

金沢大学医薬保健研究域医学系

皮膚分子病態学

この度、“全身性強皮症におけるサイトカイン産生B細胞の機能解析ならびに新規治療法の開発”に関し、平成29年度(第14回)金沢大学十全医学賞を賜りましたこと、大変光栄に存じます。

全身性強皮症(強皮症)は、抗トポイソメラーゼⅠ抗体や抗セントロメア抗体などの自己抗体産生、高γグロブリン血症に代表される自己免疫現象を背景に、皮膚および内臓諸臓器の線維化、血管病変によって特徴づけられる膠原病であります。強皮症に対する有効な治療法は未だ確立されておらず、その開発が望まれております。この強皮症の病態形成には自己抗体産生などによりB細胞が強く関与していることが知られています。B細胞はこれまで主に抗体産生細胞としての側面から研究が進められてきましたが、近年、サイトカイン産生細胞としての機能が明らかとなりました。我々はRegulatory B細胞とEffector B細胞の表現型解析を行い、強皮症の病態形成においてRegulatory B細胞はIL-10産生を介して病態を抑制し、Effector B細胞はIL-6産生を介して病態を促進することを見出しました。また、B細胞の強力な活性化因子であるBAFFを阻害することによりサイトカイン産生B細胞のバランスをRegulatory B細胞優位とし強皮症が改善しうることが明らかにしました。今後さらに研究を発展させ、B細胞を標的とした新規治療法の開発へと継続していきたく存じます。

今回の受賞にあたり、臨床・基礎のさまざまな面でご指導賜りました金沢大学皮膚分子病態学竹原和彦教授をはじめ、研究を支えていただきました国内外の皆様方に深く感謝いたします。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻いただきますようお願い申し上げます。

(松下 貴史：記)

第16回 高安賞

高安賞は平成15年、本学昭和39年卒業の臼井滋先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会(主査および副査)と専攻長等から構成される選考委員会の2段階で行われ、医薬保健学総合研究科・先進予防医学研究科合同運営委員会と博士課程委員会の議を経て決定される。

平成30年度受賞者には、次の3名が選ばれた。

最優秀論文賞

材木 義孝

細胞移植学(内科学第三)

Identification of an HLA class I allele closely involved in the auto-antigen presentation in acquired aplastic anemia (再生不良性貧血の自己抗原提示に関与するHLA class Iアレルの同定) Blood 平成29年掲載

優秀論文賞

村中 勇人

がん幹細胞学(腫瘍分子生物学)

A distinct function of the retinoblastoma protein in the control of lipid composition identified by lipidomic profiling (リピドミクス・プロファイリングによるがん抑制遺伝子産物pRbの脂質代謝制御における役割の探索) Oncogenesis 平成29年掲載

優秀論文賞

下島 正也

臓器機能制御学(内科学第二)

Emerin plays a crucial role in nuclear invagination and in the nuclear calcium transient. (核内カルシウム動態と核膜陥入に果たすエメリンの役割 Scientific Reports 平成29年掲載

平成30年7月7日(土)開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で堀 修医薬保健学総合研究科長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

(堀 修：記)

第14回 黒川良安賞およびスロイス賞

黒川良安賞受賞

小谷 将太(平成30年卒業)

鈴木 徳孝(平成30年卒業)

堀内 友貴(平成30年卒業)

スロイス賞受賞

上山 健斗(3年次修了)

川住 宗生(3年次修了)

山崎 智史(3年次修了)

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与が行われました。今回で14回目を迎えました。なお、両賞は医王保護者の会の支援を受けております。

第14回黒川良安賞は平成29年度卒業生の成績優秀者上位3名に授与されました。今回は3月22日の学位記授与式の席上で、小谷将太さん、鈴木徳孝さん、堀内友貴さんの3名が受賞しました。

また、スロイス賞は、3年次を修了した学生のうちから上山健斗さん、川住宗生さん、山崎智史さんの3名が成績優秀者として受賞しました。平成30年5月26日に開催された医王保護者の会総会の席上で授与されました。

(和田 隆志：記)

お知らせ

金沢大学医学部 十全同窓会 会員情報変更サイトが 新しくなりました

LOGIN情報は、事務局より各会員あてに郵送でお知らせしております。ご不明な点は事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。

TEL：076-265-2132

Email：
juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

受賞

受賞された山口成良名誉教授へのお祝いの言葉

第36回 北國風雪賞

金沢大学名誉教授、松原病院名誉院長の山口成良先生におかれましては、北國新聞社より第36回北國風雪賞を受賞されました。この賞は、石川県内において、人命救助や伝統技術の継承、地域振興に尽くすなど、各分野において地道に精進を重ね、一隅を照らしてこられた方々（自分自身が置かれたその場所で、精一杯努力し、明るく光り輝くことのできる人）を讃える賞です。山口先生は、金沢大学精神科教授時代に白山診療班の部長を務められました。先生は定年退官後も診療班顧問として毎年白山に登山されました。そして

89歳でなお現役の精神科医の先生は、驚くことに昨年も(88歳)白山に登られて診療所でボランティア活動の診療をされました。先生の長年の白山診療班に対するご尽力にはただただ頭の下がる思いと、感謝の気持ちで一杯です。先生の長年にわたる白山室堂での人命救助の功績が讃えられて今回の受賞になったと思います。

思い起こせば、今から40年近く前の昭和55年当時、私は金大医学部3年生で、それから6年生までの間、山口先生のおともをして何回も白山登山をしました。先生は日傘をさされて、私たち学生4人組(3年生から6年生まで各学年1人ずつ)が先生を囲んで、まるで大名行列のように白山に登ったことを昨日のこのように覚えております。先生は白山

室堂の診療所でも、受診した登山者を丁寧に診察して、我々学生にいろいろな医学知識を伝授してくださいました。

先生は今でも必ず学生が集う会合(新人歓迎会、夏山慰労会、卒業生送別会)に出席され、我々診療班のOBや学生を鼓舞し続けておられます。誠にありがたいことです。昔、学生時代に先生から教わった名言は「継続は力なり」です。山口先生は、まさに白山診療班においてこれを実践され、今回の受賞となったものと確信しております。今後とも我々後輩をご指導、ご鞭撻いただけますよう、心から念じてお祝いの言葉とさせていただきます。

(白山診療班部長、金沢大学眼科学教授
杉山 和久：記)

医師会コーナー



中巨摩医師会

会長挨拶

田邊 譲二

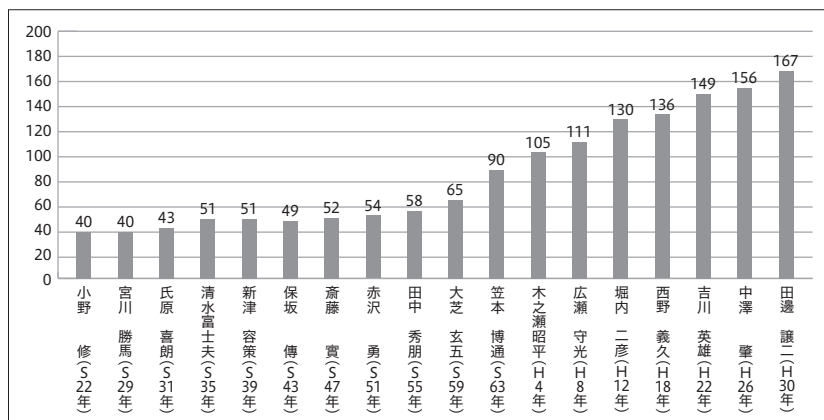
(昭和47年卒業)

この度、平成30年5月の中巨摩医師会総会において、中巨摩医師会長に選出されました。中巨摩医師会は甲斐市、中央市、南アルプス市及び中巨摩郡昭和町の3市1町(人口約20万弱)の地域で医業をする医師の一般社団法人で、日本医師会、山梨県医師会に属します。

会員数は現在167名です。

昭和町には日本住血吸虫病撲滅に尽力された杉浦父子の医院と住居を大正期の姿のままに残した国の登録有形文化財風土伝承館があります。

平成9年4月の中巨摩郡医師会報の創刊号に執筆された木之瀬昭平先生の「中巨摩郡医



中巨摩医師会会員数変動一覧

師会のあゆみ」によりますと昭和22年に小野修先生が初代会長の時は会員数40名であったとのことです。これまでの会員数の変遷をグラフにしてみました。横軸の氏名は歴代会長名で、縦軸は会員数です。

中央市に山梨大学医学部(旧山梨医科大学)が創設されてから40年経過しましたので今後この会員増加傾向は続くものと予想されます。中巨摩医師会としては3市1町の行政と連携を図り、住民健康増進事業、災害対策および新規開業相談、指導などに積極的に取り組んでいるところです。

特に夜間一次救急体制は各市町村と地域の医師会で担当していますが、患者様のニーズと医療資源の適正配置が困難で支障をきたす

ような体制になっています。また医師会に入会されず開業という施設も近年見受けます。そこで医師会の重点事業として、

1)救急医療対策 2)大規模災害対策 3)新規開業医医師会入会対策の各委員会を設置し検討しています。

福利厚生事業としては、野球チーム、ゴルフ部、麻雀大会、ワイン同好会、JOY(女医)の会および研修旅行(年1回)等の活動をしています。さらに年2回発行の中巨摩医師会報および中巨摩医師会ホームページ充実を検討しています。

開かれた医師会、コミュニケーションアップをモットーに会員一同医師会活動に努力する所存ですのでよろしくお願いします。

学会報告等

平成30年度金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会開催報告

日時／平成30年6月19日(火) 場所／金沢大学十全講堂

去る6月19日(火)に金沢大学十全講堂におきまして、平成30年度金沢大学十全医学会総会ならびに学術集会が開催されました。

総会では、まず庶務担当理事の崔吉道先生より庶務報告、会長の太田哲生から会計報告、編集担当理事の土屋弘行先生による編集報告が行われ、その内容が承認されました。引き続き、平成29年度(第14回)十全医学賞授与式ならびに十全医学賞受賞記念講演が行われました。今回、十全医学賞は金沢大学医薬保健研究域医学系皮膚分子病態学の松下貴史先生が受賞されました。松下先生の受賞研究課題名は、「全身性強皮症におけるサイトカイン産生B細胞の機能解析ならびに新規治療法の開発」で、受賞記念講演ではこれまでの研究成果とその臨床応用について詳細に紹介されました。金沢大学十全医学会雑誌の第126巻第3号に掲載されていますので、ぜひ一読いただければ幸いです。

また、本年度の学術集会は、学術集会担当

理事の和田隆志先生、河崎洋志先生、華山力成先生が中心となって、そのテーマを「人工知能とロボット技術～近未来の医学と工学の接点～」としました。そして、外部講師として現在内外で八面六臂の活躍を繰り広げられる中島孝先生(独立法人国立病院機構新潟病院院長)と辻井潤一先生(産業技術総合研究所フェロー、人工知能研究センター研究センター長)をお招きし、さらに、学内講師として角野佳史先生(金沢大学医薬保健研究域医学系泌尿器集学的治療学准教授)と菅沼直樹先生(金沢大学新学術創成研究機構未来社会創造研究コア准教授)にも加わっていただき、それぞれの先生方の研究分野から見た「人工知能とロボット技術がもたらす近未来社会や革新的医療技術」の話題について、最新の知見を交えながら分かりやすく教育的に講演をしていただきました。学術集会の講師をお務めいただきました4名の先生方に心より感謝申し上げます。今回の学術集会は、4時間



にもおよぶ長丁場でありましたが、それでも300人を超える参加者があり、最後まで熱心に質疑応答が行われ、会員の皆様方の人工知能やロボット技術に対する関心の高さに驚かされた次第です。

最後になりましたが、本学術集会の開催に向けてご尽力を賜りました関係者各位ならびに学術集会に参加していただきました会員の皆様方に心より感謝申し上げます。

(十全医学会会長 太田 哲生：記)

第46回日本磁気共鳴医学会大会開催

日時／平成30年9月7日(金)～9日(日) 場所／ホテル日航金沢、金沢市アートホール

2018年9月7日から9日の3日間、JR金沢駅前のホテル日航金沢および金沢市アートホールにおいて第46回日本磁気共鳴医学会大会が開催されました。

日本磁気共鳴医学会は、MRIに関連する基礎技術者、ソフトウェア開発者、臨床医、放射線技師などからなる多職種横断的な学会です。大会は46回の歴史を有しますが北陸地方での開催は初めてであり我々にとって記念すべき大会です。

大会長は金沢大学医薬保健学総合研究科量子医療技術学の宮地利明教授(保健学系長)が務め、金沢大学放射線科が全面的に協力し、蒲田敏文教授以下スタッフ一同がプログラム委員、実行委員などを分担して会が開催されました。

大会テーマは“MRM Trek”、副題は“Join Together Toward New Frontiers”で、この学会の原点である学際研究・異分野融合研究

にスポットをあてた多数のセッションが計画されました。特に大会初日はinternational session dayと位置づけて、functional MRIやBOLD効果の生みの親としてノーベル賞の有力候補者である東北福祉大学特任教授の小川誠二先生、最近注目されているIVIM解析の生みの親であるDenis Le Bihan先生による英語特別講演や、金沢大学先魁プロジェクト2018の共催のもとWater in Brainと題したシンポジウムなどが行われ、いずれも大盛況でした。

また、最終日にはThe New Trend of AI-Deep Learning and Its Impact on MR imaging areaと題したシンポジウムにて最近の流行である人工知能やディープラーニングとMRI技術や画像診断との関係や将来像に関する活発な議論が行われました。

直前に台風21号による関西空港の閉鎖や北海道胆振東部地震が発生するという厳しい



状況下にもかかわらず国内外から約1900名の参加者が集まり3日間の会は盛会裏に終了いたしました。

(小林 聡：記)

平成30年度金沢大学関連病院長会議

日時／平成30年7月7日(土) 場所／金沢大学附属病院4階宝ホール

平成30年度金沢大学関連病院長会議が平成30年7月7日(土)に金沢大学附属病院4階宝ホールで14時半～16時半の予定で開催された。

会長不在のため副会長の橋爪福井県立病院院長の挨拶の後、議長に竹田黒部市民病院院長が選出された。次期関連病院長会議会長に高田金沢市立病院院長が選出された。富山ブロックから2施設の退会があり、82病院中59施設の病院長(代理も含む)の出席があった。まず、平成29年度収支決算、平成30年度予算が承認された。次に役員、役員異動、金沢大学附属病院の人事異動が報告され、自己紹介ならびに挨拶が行われた。

引き続き行われた意見交換会では、金沢大学からは附属病院長から報告があった。研究では、第3期にあたる北信がんプロが採択されたこと、臨床研究中核病院の申請状況の説明があった。診療では、設備投資として新型daVinci購入、CT4台、MRI4台の最新装置への更新、働き方改革として、出退勤管理システムの導入の説明がなされた。教育では、本年度も医師国家試験の合格率が高いこと(現役、浪人全体の合格率は96%で国立大学で1

位)が報告された。これは、卒業試験の統合試験への移行や、臨床各科の6年生に対する国試対策講義の実施など取り組みの成果が強調された。臨床研修医も定員50名中46名のマッチング(マッチ率92%)で、そのうち金沢大学出身者が41名を占めたこと、専門研修医(専攻医)も石川県全体で110名、金沢大学は76名と、地方の国立大学では健闘していると報告された。

和田隆志医学系長・類長からは、学類の学生が臨床実習等で関連病院には大変お世話になっていることへの謝辞、国際認証に伴い臨床実習の時間が従来の1.5倍になり、評価方法も変更となったこと、Post-CC OSCEに対する支援のお願い、医学類特別枠の募集定員は平成31年度までは従来どおり10名であるが平成32年度以降は未定であること、内科再編については、ワーキングで定期的に検討を行っていることなどの説明があった。

吉崎副院長(臨床教育担当)からは、臨床研修に関する話題提供としてスライドを用いた説明があった。

ブロック別の要望では、富山県からは新専

門医制度にともなう専攻医の登録増の要望、定年退職を迎える医師の補充の依頼等がなされた。石川ブロックからは、学部教育、専門医教育に対する関連病院の協力の申し入れ、医師確保、地域枠についての今後の展望、働き方改革に対する大学の対応、女性医師への対応、医師以外の医療職の関連病院への派遣などの意見・要望があった。福井県からも地域枠の医師が金沢大学のプログラムに応募した場合の対応、専攻医および専門医の派遣増の要望があった。

最後に次期会長である高田金沢市立病院院長から以下のような挨拶があり、閉会となった。医学教育も学年進行で変わっていくと思うが、今後は一般病院も研修医だけでなく、学部学生にも教える体制を整える必要がある。海外では、大学だけでなくコミュニティで教育するコミュニティ・ベースド・メディカル・エデュケーションの重要性が指摘されている。そのような意味でも大学と関連病院が連携していくことが大切である。本会を盛り上げていきたいので協力をお願いしたい。

(蒲田 敏文：記)



埼玉医科大学は1892年創立の毛呂病院を母体として1972年に埼玉県で初めての医学部として発足した。建学以来一貫して地域に根ざした「すぐれた実地臨床医家の育成」を理念としてきた。現在では医療系2学部4学科と看護短期大学などをもつ4キャンパスの医科系大学である。埼玉県南西部をカバーする大学病院群を持ち、毛呂山町の大学病院(970床)、川越市の総合医療センター(1053床)、日高市の国際医療センター(700床)と川越駅前にかわごえクリニックがある。人口は約700万人で全国第5位、人口密度第5位の埼玉県は医師実数は多いのだが、有名な人口あたりの医師過少県である。病院群は埼玉西部の高度医療を担っている。大講座制を廃止し、大学組織を診療、教育、研究の3部門に別けて、責任を分担しているため、全てを統括するような主任教授の役職はない。主に病院ごと、診療科単位の運営が行われている。当大学卒業後に残る医師数では全く足りず、全国の大学出身者がスタッフとなっている。当大学には金沢大学出身者も多く、重要な役割を果たしている。現在知り得る範囲で常勤教員15名の在籍である。非常勤の同窓会員も多いが、誌面の関係で割愛させていただいた。

1. 宮前 達也 名誉教授(昭和37年卒業)

趣味：囲碁アマチュア5段



全共闘安田講堂攻防戦を目の当たりにした東京大学放射線科を退任し、埼玉医科大学放射線科講師として着任したのは昭和47(1972)年

8月。以来、核医学診療部をゼロから立ち上げることに邁進した。まずは、対向5インチスキャナーを導入し、翌年4月には良質な画像のAu-198コロイドによる肝シンチグラムを得ることができた。続いて待望のシンチカメラを整備し、多数の症例でアンジオグラフィを行い、クリニカルリサーチとしてまとめることができた。スタッフの補充が急務だったが、他大学出身の2名の医師が常勤として加わり、診療放射線技師も増員され、核医学診療部の陣容が整った。1970年代後半から核医学は目覚ましく発展し、昭和59(1984)年には埼玉医大の核医学検査件数は年間約1万件に達した。私は平成15(2003)



時の鐘：川越市の中心部で蔵造りの街並みにある鐘楼(時計台)

年4月から小川赤十字病院長として就任することになった。後任の推薦委員会の要請を受けて十全同窓生の松田博史先生を推薦したところ、国際医療センター教授として迎えることになり、PETを中心とする核医学施設の充実が図られた。その後、同センターで久慈一英教授、大学病院で松成一郎教授といった熱意ある同志が活躍している。

2. 徳山 研一 教授(昭和54年卒業)

大学病院 小児科



昭和54年に卒業後、郷里の群馬大学小児科に入局し、平成22年より現職です。専門は小児のアレルギー疾患で、特に気管支喘息が主たる研究テーマです(研究紹介：小児気管支喘息特有の病態解明を目指して— 気道炎症の側面から— 金沢大学十全医学会雑誌 121(3):132-133, 2012、参照)。以前難治例が多く小児アレルギー専門医の腕の見せ所であった喘息は治療法の進歩で以前よりコントロールが容易となっています。一方、食物アレルギー児は経口負荷試験による的確な診断と管理が必要ですが、その増加に比べ対応できる施設が限られています。アレルギー基本法が成立し、埼玉県では当院がアレルギー拠点病院に指名されたこともあり、リーダーシップを発揮し地域のアレルギー診療にも対応していく所存です。

3. 中山 光男 教授(昭和57年卒業)

総合医療センター 呼吸器外科

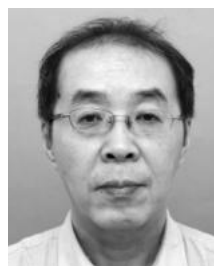


卒業後慶應義塾大学医学部外科学教室に入局し、立川共済病院勤務、米国スタンフォード大学留学を経て、平成9年4月に講師として埼

玉医科大学総合医療センターに赴任。肺癌の外科治療や気管気管支狭窄症の治療に積極的に取り組み、平成20年8月に前任の菊池功次教授(昭和51年卒)の後を受け呼吸器外科教授を拝命しました。若手呼吸器外科医の育成に力を注ぎながら、胸腔鏡を用いた低侵襲手術から気管支・血管形成術を駆使した拡大手術まで合併症の少ない手術に努め、手術数は10年で倍増(年間280例)。さらなる発展を目指して奮闘中です。

4. 松成 一郎 教授(昭和62年卒業)

大学病院 核医学診療科



私は昭和62年に金沢大学医学部を卒業後、核医学講座に入局し、大学院では心臓核医学を専攻し現在の私の礎となっています。平成3年

より福井県立病院放射線科に勤務し、平成7年よりミュンヘン工科大学核医学科に留学しました。帰国後、先端医学薬学研究センター

に勤務しました。平成27年より埼玉医科大学病院に赴任し、現在に至っております。こちらでの生活も3年以上経ち、ようやく慣れてきました。昨年は次世代型の検出器と言われるCZT検出器を用いた全身用SPECT/CT装置が日本で1号機として導入され、様々な研究に取り組んでいるところです。

5. 久慈 一英 教授(平成2年卒業)

国際医療センター 核医学科



平成16年に金沢大学病院核医学診療科から大学病院放射線科(核医学診療科)に赴任。平成19年の国際医療センター開設時から在籍している。当院では放射線科は画像診断科、核医学科、放射線腫瘍科の3科に分かれている。PET薬剤合成まで可能なフル装備で大学病院としては国内有数の核医学検査数および核医学治療数を施行している。核医学のみで4名の専門医スタッフがおり、大学病院の核医学診療科松成教授と協力して現在でも一体的な診療を行っている。先代の松田博史教授(現客員教授、昭和54年卒業)から金沢核医学の血脈を受け継ぎながらも、独自の埼玉核医学の中心として発展している。

6. 加藤 直子 准教授(平成2年卒業)

大学病院 眼科 (7月末で退職)



平成2年に卒業後、母校の眼科学教室に入局、その後はドイツのエアランゲン大学眼科に留学、帰国後は東京歯科大学市川総合病院、慶應義塾大学、日本医科大学武蔵小杉病院、防衛医科大学病院を経て3年前に埼玉医科大学病院眼科に赴任しました。金沢市出身であったために同期からは一生金沢にいたのだろうと言われていたにもかかわらず、いろんな場所を転々とするようになりました。角膜疾患、角膜移植などの前眼部を専門としています。

7. 矢形 寛 教授(平成2年卒業)

総合医療センター プレストケア科



金沢大学卒業後は千葉大学医学部第一外科学(現在の臓器制御外科学)教室に入局、平成16年より聖路加国際病院プレストセンターに移り、年間800例以上の手術症例数の中で、乳房温存治療における整容性についての啓発普及や、遺伝性乳癌・卵巣癌症候群の診療に、国内で先導的役割を果たしました。平成27年より当大学総合医療センタープレストケア科に異動し、現在は埼玉県乳腺専門医が集まり、臨床試験や乳がん検診の標準化などに取り組んでいます。埼玉の乳腺診療が日本をリードできるように努めてまいります。

8. 鈴木 智成 准教授(平成6年卒業)

国際医療センター 脳脊髄腫瘍科



私は現在、埼玉医科大学国際医療センターの脳脊髄腫瘍科にて、脳腫瘍の臨床および研究に従事しております。金沢大学卒業後は群馬大学脳神経外科に所属し、12年間の研修をさせていただきました。その後の患者さんとの出会いにより、小児の脳腫瘍に強く心を動かされ、2006年当時、国内で最も同領域に力を入れていた埼玉医科大学に移りました。手術数も多く、臨床に明け暮れる毎日でなかなか研究をする時間はありませんが、国際学会の開催や国内の臨床試験の策定を含め、積極的に小児中枢神経腫瘍の治療改善に努めております。

9. 平能 康充 准教授(平成10年卒業)

国際医療センター 消化器外科



金沢大学を平成10年に卒業後、第一外科に入局。渡邊剛教授の指導のもと学位を取得。またロボット手術を習得するためにイタリア留学も経験させていただきました。平成22年に福井県立病院にて全国に先駆けて単孔式腹腔鏡下

手術を大腸疾患に導入し、これまでに約870人の患者様に施行。その業績をご評価いただき、本年4月に国際医療センターの消化器外科に准教授として赴任しました。今後、当科の全国トップクラスの恵まれた手術症例を活かして、さらに体に優しく、質の高い大腸癌に対する医療を幅広く提供していきたいと思っております。

10. 辻田 美紀 准教授(平成11年卒業)

国際医療センター 麻酔科

医師として10年目に埼玉医科大学国際医療センター麻酔科に赴任し、10年がたとうとしています。小児循環器疾患の管理を専門にしていますが、全ての麻酔管理をしなくてはなりません。緊急手術も多く忙しい病院ですが、各科専門に特化しており、他科との横のつながりが強い大学病院です。卒業後金沢を離れ疎遠になっていましたが、当院で大学の先輩、後輩と仕事をする機会を得、大学時代や金沢の話をし、懐かしく思っています。

11. 松原 三郎 准教授(平成11年卒業)

総合医療センター 肝臓・消化器内科



卒業後東京大学消化器内科に入局し、現順天堂大学消化器内科教授の伊佐山浩通先生率いる胆膵グループに所属し研鑽を積みました。関連病院の勤務を経て、平成26年東京大学消化器内科助教、平成29年に埼玉医科大学総合医療センター消化器・肝臓内科の屋嘉比康治教授にお声かけいただき、膵・胆道疾患全般に対する責任者として診療・若手医師の指導・学生の指導・臨床研究・地域への啓蒙活動等に励んでいます。膵癌を筆頭に膵・胆道疾患患者は増え続けており、外科と連携しながら低侵襲で最新の治療を提供できるように頑張っております。

12. 青木 耕平 講師(平成17年卒業)

総合医療センター 呼吸器外科



平成17年に卒業後、板橋中央総合病院での2年間の初期臨床研修を修了した後、埼玉医科大学総合医療センター呼吸器外科に入局いたし

ました。金沢大学の大先輩である菊池功次先生、中山光男先生のご指導のもと、修練を積み、現在は病棟医長という立場で日々診療を行っております。臨床がメインではありますが、その合間にDual energy CTを用いた新しい肺機能画像についての研究に携わっております。この地の呼吸器外科の発展にさらに尽力していきたいと思ひます。どうぞよろしくお願いいたします。

13. 上出 智也 講師(平成17年卒業)

国際医療センター 脳卒中外科



平成17年に金沢大学を卒業後、2年間の臨床研修を経て、金沢大学脳神経外科に入局致しました。大学病院及び関連病院で諸先輩

方よりご指導を賜り、平成28年4月から海外

留学(カリフォルニア大学サンフランシスコ校: UCSF)の機会をいただきました。その後、平成29年4月より手術研鑽を目的に日本を代表するhigh volume centerである埼玉医科大学国際医療センター脳卒中外科に国内留学させていただき、現在に至ります。平成30年7月からは講師及び病棟医長を務めることとなり、より一層診療、教育、研究に邁進していきたいと考えております。

14. 原 佑樹 助教(平成25年卒業)

大学病院 放射線科



金沢大学を卒業後、故郷の群馬県で2年間の臨床研修を終えた後、平成27年4月から埼玉医科大学放射線科の医局員として勤務しております。

放射線科医になって驚いたのは、埼玉医大に

は金沢大学関係の放射線科の先生方が大勢いらっしゃることでした。これは大変頼もしいことで、諸先輩方のアドバイスを受けつつ、有意義な専門研修を送っております。金沢には部活のOB会や学会等で年に1-2回行く程ですが、年々街並みが進化しており、今度は是非家族で訪れようと思ひます。

他にも以下の同窓が在籍している。

瀬戸 陽 講師(平成3年卒業)

国際医療センター 核医学科

小田垣雄二 准教授(昭和57年卒業)

大学病院 精神神経科

(久慈 一英: 記)

御遺骨返還式・合同慰霊祭

日時/平成30年6月16日(土) 場所/金沢大学十全講堂

平成30年度の御遺骨返還式・合同慰霊祭は午前10時、文部科学大臣感謝状伝達式から始まりました。木下正一総務課長による開式の辞に引き続き、和田隆志医学類長よりご遺族おひとりおひとりに文部科学大臣感謝状が伝達され、感謝の言葉がご家族の皆様へ述べられました。

献体者御遺骨返還式は午前10時半から、御遺族の皆様、しらゆり会会長の井沢義武様、理事長の清水誠一様をはじめとしたしらゆり会役員の方々、会員の皆様にご出席いただき、和田隆志医学類長、医学系と附属病院の教職員、学生が出席して始まりました。名誉会員37名のご冥福を祈って黙祷をさされた後、祭主の和田隆志医学類長が追悼の言葉を述べられました。出席者全員が壇上の御遺骨に感謝の気持ちを込めて献花をし、和田隆志医学類長から御遺骨がご遺族に返還されました。最後に学生を代表して奈須仁克君(3年生代表)が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当者を代表して機能解剖学教授の尾崎紀之がお礼の言葉を申し述べました。

合同慰霊祭卯辰山墓地法要は午後1時から

金沢大学医学部卯辰山墓地において、覚林寺ご住職のご読経とご講話を賜り、肅然と営まれました。ご遺族としらゆり会の皆様のご臨席を仰ぎ、和田隆志医学類長、教職員と学生が参列し焼香、参拝しました。この墓地には、明治20年設置の第四高等学校医学部から現在に至るまでの、約6千名の献体者の芳名墓碑が36あり、井沢義武しらゆり会会長のご尽力もあり、金沢市よりその整備についてご配慮をいただいています。

第116回合同慰霊祭は午後2時半に始まりました。祭壇には正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた149名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族とご来賓、しらゆり会役員ならびに会員の皆様のご臨席を仰ぎ、和田隆志医学類長、谷内江昭宏附属病院副院長、医学系と附属病院の教職員、そして学生が参列しました。黙祷の後、和田隆志医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に谷内江昭宏副病

院長が謝辞を述べられ、慰霊祭は滞りなく終了しました。

7月3日(火)、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。和田隆志医学類長をはじめとする医学系の教職員多数の方々参列されました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者の冥福を祈りました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成14年10月に修造して下さったホルトルマン(金沢医学所教師)愛児(明治9年~10年歿)の墓碑にも奉拝しました。

(尾崎 紀之: 記)



Juzen FORUM HISTORICUM 十全歴史ひろば

創立150周年前後に 寄贈された貴重資料

山本 博
小島 直人
高田知代子

歴史が節目を迎えるとき、ひとやものの価値が再認識される。医学部創立150周年前後は、私たちにとって、正に、そういう機会であった。当時、本学の歴史を知り、また、伝えるうえで、きわめて貴重と考えられる多くの資料が、相継いで本学に寄贈された。茲に記録にとどめ、後世につなげたい。

表は、寄贈資料のリスト。概要を述べると、

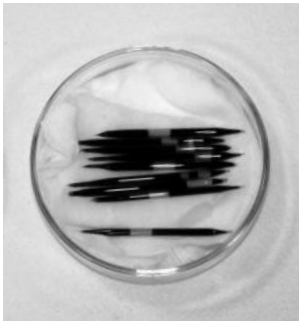


写真1 牛痘種痘痘苗



写真2 岩崎憲先生受賞の日本学士院賞メダル

- 1. **解剖実習帖** 在学中から画才を讃えられた小坂進先生によるスケッチ。創立150周年記念誌に掲載された¹⁾。寺畑喜朔先生の検印が認められる。
- 2. **卒業記念アルバム** 貴重な官立金澤醫學専門學校時代の卒業記念アルバム2冊が、卒業生のご子孫から寄贈された。
- 3. **痘苗** 写真1はガラス管に封入された牛

- 痘種痘苗(非感染性)。須藤憲三第2代金澤醫科大學學長の書や、痘苗接種用具などとともに、竹内桂一先生から寄贈された。
- 4. **手術簿** 記録的な数の低侵襲胃腸手術を実践した伝説の外科医、大幸英吉先生の手術記録。
- 5. **日本学士院賞メダル等** 第2代医化学教授、岩崎憲先生受賞の日本学士院賞メダル(写真2)と天覧に供されたアツトメーターが、ご遺族から寄贈された。長く岩崎家にあって、日々線香が手向けられていた、恩師須藤憲三先生のご遺影も併せ寄贈された。
- 6. **高安右人関連資料** 高安右人初代金澤醫科大學學長の辞令等一式が、高安家から寄贈された。明治一大正期の医学教育機関に関する第一級資料と評価される。文献²⁾に詳細が報じられている。
- 7. **稀観本** 北陸史学会会長も務められた正橋剛二先生のご遺族から、稀観本類、四高関係資料、医史学関係資料が、それぞれ金沢大学医学類、金沢大学資料館、北陸史学会に寄贈された。医史学関係書類の内容は、文献³⁾で報告されている。
- 8. **黒川翁石碑拓本** 本学の創始者、黒川良安の生誕地である富山県中新川郡上市に建立された黒川翁顕彰碑碑文の拓本。寄贈者三田良信氏は、漢詩や石碑の研究で知られる郷土史家であったが、昨平成29年物故された。
- 9. **内象銅版圖等** 内象銅版圖は、「臍」などの和訳が初出する宇田川玄真作「医範堤綱」の付図。わが国最初の銅版解剖図として夙に有名である。同図を含む貴重資料が、江戸前期からつづく医家、河崎家から寄贈された。
- 10. **衛生新編** 「衛生新編」は、「動物学」と並んで、ひろく人口に膾炙するところとなったスロイス著。赤祖父一知先生から寄贈された。

物品名	数量	寄贈者	寄贈または受領時期
小坂進 解剖実習帖(昭和28年)	1冊	小坂 牧子	平成23年2月
金澤醫學専門學校卒業記念アルバム(大正2年)	1冊	岩崎 泰正	平成24年
金澤醫學専門學校卒業記念アルバム(大正元年)	1冊	柳川 昇	平成24年
須藤憲三書掛軸(昭和己巳春)	1幅		平成24年
金澤醫科大學學士試験合格證書(第70號 竹内隆良 昭和4年)	1枚		
牛痘種痘痘苗	9本		
種痘接種用具	1式		
エルマ Hemometer	1個	竹内 桂一	平成26年11月5日
エルマ 血球ピベット赤血球用	2本		
エルマ 血球ピベット白血球用	6本		
エルマ トーマ式計算盤	1枚		
ツベルクリン反応測定器	1個		
ニス塗木箱	1個		
組織凝固器(変圧器付)	1式		
TAKEBE卵管通気装置	1式		
大幸病院手術簿(昭和25-昭和60年)	245冊	大幸 甚	平成27年4月13日
岩崎憲 天覧アツトメーター	1個		
岩崎憲 二球式アツトメーター	1個	岩崎 皓三	平成28年3月20日
須藤憲三 肖像写真	1枚		
高安右人 辞令等ファイル	1冊	高安 慎治	平成28年3月22日
高安右人 肖像写真	1枚		
ロデリッヒ F. ルシターニ 植物誌	1部		
木下圭太郎 百花譜百選 澤柳大五郎選	1部		
木下圭太郎 新百花譜百選 前川誠郎選	1部		
DAUMIER DOCTORS & MEDICINE	1部		
ジーボルト 日本鳥類図譜	1部	正橋 立子	平成28年8月18日
ドドネウス 博物書	1部		
ドドネウス ヴェチカン本	1部		
ヒボクラテス全集	1部		
PROMENADE AUTOUR DU MONDE	1部		
明治開化期錦絵	1部		
ヨンスター 動物書	1部		
デ・レ・メタリカ(1912年英文復刻版)	1部		
黒川良安翁顕彰碑碑文拓本	1式	三田 良信	平成28年9月15日
宇田川玄真 医範堤綱 円象銅版圖	1冊		
西音發微	1冊		
西音發微(附西洋字原考)	2冊	河崎 哲朗	平成28年9月15日
眼底模型	1個		
頭蓋骨	1点		
側頭骨	1点		
ライツ顕微鏡(附属品及び説明書付き)	1台		
日本学士院賞メダル(岩崎憲)	1点	岩崎 皓三 国広 和子	平成28年10月27日
金澤醫科大學開學記念メダル	1点		
創立百年記念文鏡	1点	赤祖父一知	平成28年10月27日
スロイス氏講義 稲坂謙吉筆記 岸田吟香校閲 衛生新編	上下各1冊		平成28年

表 創立150周年前後に寄贈された資料のリスト

文献
1) 金沢大学医学部創立150周年記念誌第四部写真 pp.462(平成24年10月発行)
2) 山本 博、杉山和久、小島直人、高田知代子「高安右人と金沢大学—高安家から寄贈された資料を中心に—」北陸医史39: 52(平成29年1月発行)
3) 山本 博、篠原治道、新村祐子「故正橋剛二先生所蔵古医書類のご寄贈」北陸医史39: 56(平成29年1月発行)

病院紹介

金沢市立病院

設立118年の自治体病院

金沢市立病院の沿革は、明治33年3月に金沢市伝染隔離所を桃島町に設置し、明治35年に金沢市立桜木病院と改めました。本年度で設立118年となります。その後、昭和3年に内科、外科を中心とした金沢市立金沢病院(昭和25年に金沢市民病院に改称)、昭和23年に金沢市産院を新設しました。昭和34年8月金沢市民病院を総合病院金沢市立病院に改称し、平和町3丁目の現在地に移転しました。平成元年に現在の金沢市立病院の建設工事が完了(一般病床280床、結核病床40床、感染症病床40床の計360床)しました。また、平成11年に東館(健康管理センター、透析センター、内視鏡センターほか)の増築を行いました。その後、結核病床、感染症病床の削減を行い、現在病床数311床(一般病床230床、地域包括ケア病床50床、結核病床25床、2類感染症病床6床)となっています。

金沢市立病院は、金沢市の自治体病院として、市民の生命と健康を守るため、地域

のニーズを反映し市民に信頼される質の高い病院を目指しています。診療科については、現在22診療科により運営されています。また、診療科間の連携、チーム医療の推進の観点からセンター化を行っており、現在、メタボリックシンドロームセンター、呼吸器・睡眠センター、脳センター、消化器センター、循環器センターを設置しました。

コミュニティー医療の実践

当院の使命は、“安全、安心、味わいの医療”としています。“味わい”は、患者さんや住民の方が能動的に参加しなればできないことで、住民参加型の医療を目指しています。災害医療、結核・感染症医療、救急医療などの不採算部門の医療を行うとともに、開発型・先端医療の実践、チーム医療の実践、病診連携や医療と介護の連携にも取り組んでいます。特に、ICTを用いた医療・介護連携、遠隔モニタリングシステムの開発は本年度の課題です。

教育、研究についても病院の土台づくり

と位置づけ、認定看護師をはじめとする資格取得のサポート、大学院社会人入学の補助、科学研究費や補助金の取得などを行っています。看護用品の創作では、日本ホスピタルショウでグランプリを獲得しました。

また、ホスピタリティー・アートプロジェクト、健康増進・地域貢献プロジェクト、臨床研究プロジェクトを設置し種々の取り組みを行っています。ホスピタリティー・アートプロジェクトでは、金沢美術工芸大学との連携により安らぎの空間づくりを行っています。健康増進・地域貢献プロジェクトでは、本年より、病院の前の商業施設に“まちなかサロン”を作り、高齢者の方の生きがいづくりを行っています。臨床研究プロジェクトでは、臨床開発室を設置し、教育研修室を整備するとともに、医療統計などのソフトをいれたIT機器を整備しました。臨床研修医も、毎年6名以上おり、ナンシー市との交換研修も順調に行われています。

(院長 高田 重男：記)

概要

金沢市立病院	
所在地	石川県金沢市平和町3-7-3
開設	明治33年3月(昭和34年8月に名称変更)
病院長	高田 重男
病床数	311床
診療科数	22

沿革

昭和34年	金沢市立病院に改称 現在地(平和町3丁目)に移転
平成13年	睡眠呼吸障害センター新設
平成18年	開放病床(オープンベッド)稼働
平成23年	石川県地域がん診療連携推進病院指定

黒部市民病院

「日々念心」を病院憲章に

黒部市民病院は、昭和23年1月桜井町国民健康保険組合直営組合立下新川厚生病院として産声を上げました。当時の診療科は内科、外科、耳鼻咽喉科の3科、病床数72床、職員数23名でしたが、現在では、それぞれ33科、414床、常勤医師数89名を含め約580名に増加し、県東部新川医療圏の中核病院として発展を遂げています。平成24年より5年間かけて行われた増改築事業では、併設の老健施設が50床から80床に増床、手術室・ICU病棟・新川地域救命センター・各科外来を含む中央棟が新築、さらに、旧外来棟に駐車場が整備されました。

当院は、初代院長の草野久也先生の遺訓「日々念心」(にちにちねんしん：医療者の研究と工夫努力に裏打された患者さんとのこころの医療)を病院憲章と定めています。また、1)新川医療圏の基幹病院として地域の医療・保健・福祉施設と連携、2)5疾病5事業の拠点として機能強化、3)患者さんを中心に、家族、全医療スタッフが参加したチーム医療、4)病院スタッフのワークライフバランスの

推進、教育・研修機能の充実、5)経営の効率化と健全経営、以上を基本方針としています。

良医育成と医療連携に尽力

当院が力を入れている事業は、臨床研修制度とICTを利用した医療連携です。臨床研修制度発足当時の高校院長は、良医を自らの病院で育てようと当院の制度整備に尽力され、その甲斐あって平成16年からこれまで86名の若い医師が2年間の臨床研修を受けています。当院の研修の特徴は屋根瓦方式と呼ばれる指導体制と、米国ジョージア州メーコン市との医学交流プログラムです。屋根瓦方式とは救急・当直業務において1年目と2年目の研修医と一緒に初期診断・治療にあたり、その後上級医から指導を受けるというやり方であり、これは研修医の教育の観点から有効であるばかりでなく、上級医の救急・当直業務の負担軽減にもつながっています。医学交流プログラムは米国指導医が毎年3人、1人2週間研修医の指導にあたっていただいているほか、研修医が2年目にメーコン市の病院を訪問しています。

医療連携ネットワークの運用

当院では平成18年8月に、承諾を得た患者の電子カルテ内にあるすべてのデータを地元医師会員にむけて公開する「扇状地ネット」の運用を開始しました。その後平成25年3月電子カルテの入れ換えを機会にバージョンアップし、カルテ閲覧に加え、予約の取得、紹介状・返書の管理が可能となりました。さらに利用範囲を医師以外に歯科医師、薬剤師、訪問看護師、ケアマネジャー、リハビリ療法士に拡大し、現在の登録患者数は約2500名となっています。

一方、大きな課題は看護師、薬剤師の不足です。看護師は毎年30人以上募集していますが、定員に達することはありません。今後とも課題解決に向けて職員一同心を一つに取り組んでいく覚悟でおります。十全同窓会員の皆様のご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

(院長 竹田 慎一：記)

概要

黒部市民病院	
所在地	富山県黒部市三日市1108-1
開設	昭和23年1月(昭和51年に名称変更)
病院長	竹田 慎一
病床数	414床
診療科数	33

沿革

昭和23年	1月に桜井町国民健康保険組合直営組合立下新川厚生病院として開設
平成18年	新川地域医療連携ネットワーク「扇状地ネット」運用開始
平成24年～	老健施設の増床、駐車場整備 中央棟新築

教室だより

神経解剖学 (旧解剖学第三)



研究の紹介

私たちは、神経細胞とグリア細胞、血管細胞等で構成される脳内の環境がどのように維持されているか、さらにその破綻がどのようにして疾患の発症に結びつくのか、というテーマで研究を行っています。具体的には主に以下の3つの研究を行っています。

1. 小胞体ストレス応答による脳内環境維持とその破綻

神経細胞は環境変化にきわめて弱く、短時間で細胞死に至りますが、グリア細胞の一つアストロサイトはこの環境変化に対して強く、かなり生き延びることが知られています。私たちはこのアストロサイトにおけるストレス応答に注目し、そのメカニズムを解析しました。そして、細胞内小器官の一つ小胞体におけるストレス応答が、脳環境の維持に重要であることを見出しました。小胞体ストレスは脳虚血(脳梗塞)、神経変性、外傷などの病態で発生しますが、これまでその重要性については不明でした。我々は小胞体ストレス応答の主要3経路のうち、特にATF6 α 経路についてノックアウトマウスや培養細胞系を用いた解析を行い、同経路が神経細胞の生存を促

進するほか、グリア細胞の活性化にも必要であることを明らかにしました。今後、他の経路についても検討していきたいと考えております。

2. アストロサイトによる脳内環境の改善

最近の研究から、アストロサイトは単なる神経細胞の補助細胞ではなく、神経活動の調節や血流の制御を担う極めて重要な細胞であることがわかってきました。そこで私たちは、アストロサイト特異的に発現する新規分化関連遺伝子NDRG2 (N-myc downstream regulated gene 2)の機能解析を開始しました。これまでに、脳梗塞モデルやパーキンソン病モデルにおいてNDRG2はアストロサイトによるグリア瘢痕形成や血液脳関門強化により神経を保護することを発見しました。今後、そのメカニズムについて更に分子レベルで解析していきたいと考えております。

3. 自閉症関連遺伝子による脳内代謝制御とグリアネットワークの形成

CD38は45kDaからなる膜蛋白質で、NAD⁺からcADPリボース、更にADPリボースを生成することが知られています。これま

での研究から、CD38ノックアウトマウスでは視床下部神経からのオキシトシン分泌量が低下し、母親の養育行動や社会的認識記憶に異常が認められることが明らかにされています。しかし、CD38は生後発達期のアストロサイトで強発現していることから、私たちは同分子が同時期のアストロサイトを介して脳の発達に関与しているのではないかと仮説を立てました。そして、生後発達期の脳において、CD38がアストロサイトの発達、更にオリゴデンドロサイトの分化にも重要であることを明らかにしました。そのメカニズムとして、基質であるNAD⁺が脳内に過剰に存在することが重要であることも発見しました。現在、アストロサイトに発現するCD38がマウスのどのような行動に影響を与えるか等について検討を行っています。

おわりに

教授に就任して早9年が過ぎました。研究室のメンバーも増え、だいぶ活気も出てきたと感じております。引き続き同窓会会員の皆様のご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

(堀 修：記)

スタッフ

教授 堀 修
准教授 服部 剛志
助教 宝田 美佳、石井 宏史
技術職員1名、事務補佐員1名、
研究員2名、大学院生2名、
医学類生5名(MRTプログラム)

研究分野の沿革

昭和28年7月、本陣良平助教が初代講座主任として着任され、研究室としての活動が始まりました。その後、昭和33年から松田健史助教、昭和51年から高橋暁助教、昭和56年から中村泰尚教授、平成2年から工藤基教授、平成11年から小川智教授が教室を担当されました。平成21年4月、堀修准教授が4代目教授(7代目講座主任)に昇任されました。現在、左記メンバーと共に教育(神経解剖、発生学担当)および研究を進めております。

先進総合外科学 (旧第一外科)



診療

● **心臓血管外科** 心臓外科、血管外科からなり、年間400例を超える手術を行っております。心臓外科部門では、虚血性心疾患、弁膜症、不整脈など幅広い領域を診療対象とし、低心機能、腎不全、脳血管障害など多くの合併症を抱えたハイリスク症例に対しても良好な成績を得ております。手術の低侵襲化を目指し、僧帽弁形成術では右小開胸・3D胸腔鏡補助下による低侵襲手術を、大動脈弁置換術では循環器内科と連携して、カテーテルにより生体弁付きステントを留置してくる経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVR)を施行しております。血管外科部門では、急性大動脈解離、胸部大動脈瘤破裂、腹部大動脈瘤破裂などの緊急症例に対しても血管内ステントグラフト治療を行い、良好な成績を得ております。

● **呼吸器外科** 肺癌(原発性、転移性)を中心に、呼吸器外科疾患全般(気胸、縦隔腫瘍、漏斗胸手術など)を対象に年間300例の手術を行っています。各疾患の手術で内視鏡を用いた低侵襲手術を積極的に取り入れています。とくに肺癌手術では完全鏡視下に肺葉(区域)切除とリンパ節郭清を行っており、北陸随一の手術件数を有するとともに良好な手術成績をあげています。本年度よりロボット支援下手術の保険適応が拡大されたことに伴い、当科においても肺癌および縦隔腫瘍に対するロボット支援下手術を開始いたしました。進行肺癌に対しては化学療法や放射線療法を含めた複合的な治療を、中心型早期肺癌に対しては手術治療の他に、内視鏡的レーザー治療、気管支腔内照射、光線力学療法(Photo Dynamic Therapy)による治療も行っており、良好な成績をおさめています。

● **内分泌・総合外科** 甲状腺・副甲状腺疾患、ヘルニアなどの一般外科を対象として治療にあたり、手術件数は年間約200例にのぼります。耳鼻科・血管外科と合同で施行する遊離空腸移植術、慢性膿胸に対する遊離大網移植術なども施行し、良好な成績を得ております。新たな分野として、高度肥満症に対する腹腔鏡下胃縮小術の施設認定を目指しています。この手術は腹腔鏡手術における技術もさることながら、代謝内科、看護師、栄養士、薬剤師、理学療法士、そして精神科を含めたチーム医療が必要不可欠とされています。北陸地域には本術式の認定施設が存在しないため、金沢大学がこの役割を担って参りたいと考えております。

研究

● **心臓血管外科** CABGにおける移植グラフトに関する研究では、移植グラフトに与える各種血管弛緩薬の影響を解明し、現在、Rho-kinase inhibitorを用いた内胸動脈の抗攣縮作用の研究を行っています。心臓移植における新しい心臓保存法の研究では、Cell Alive System(CAS)による微弱電磁場下における非凍結下氷点での24時間心保存に成功し、現在、さらに不凍タンパクを加えたCAS非凍結下氷点での安定的心保存の研究を行っています。また、金沢大学理工学域との共同研究で粒子画像流速測定装置を用い、冠動脈吻合法の違いによる吻合部血流動態解析(流体力学解析)を行っています。

● **呼吸器外科** 移植・呼吸器再建分野では、体外肺切除(自家肺移植)における気管支創傷治癒に対してキトサンスポンジが創傷治癒を促進すること、キトサンナノ繊維チューブが横隔神経再生を形態だけでなく機能的にも再

生させることを証明しました。また、肺移植における移植肺の低温保存に関する研究では、CASによる微弱磁場環境下における過冷却保存法が移植肺の保存に有効であることを証明し、現在、不凍タンパクを用いた肺の低温保存の研究を行っています。低侵襲手術分野では、光線力学診断を利用した新しい肺区域同定法の開発や光線力学診断を利用した新しい術前肺マーキング法の開発に関する研究を行っています。腫瘍学分野では、悪性胸膜中皮腫に対する新規強磁性温熱療法とmTOR阻害剤の併用療法の開発を研究しています。

● **内分泌・総合外科** 腫瘍学分野では、がん進展制御研究所との共同研究にてヒト大腸癌オルガノイドの作製および免疫不全マウスへの移植に成功しました。この移植モデルを用いてヒト大腸癌の浸潤および転移能の解析を進めております。また胃癌組織および背景胃粘膜組織でDNAシーケンス解析を行い、両者を比較することで胃癌の前癌病変の特定、発癌メカニズムの解明を目指しております。自己腹膜の再利用に関する研究では、自己の腹膜組織を固定薬で処理して作成したシートによる腹壁ヘルニア修復術を動物実験レベルで成功させました。本結果を踏まえ、自己腹膜による消化管再建を目指しております。

おわりに

私たち先進総合外科学教室(旧第一外科)は、これまで多くの諸先輩方のご支援・ご協力をいただき発展してきました。これからも、教室員一同が力を合わせ一層の研鑽に励む所存です。十全同窓会の諸先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(木村 圭一：記)

スタッフ

教授 竹村 博文
准教授 松本 勲
講師 田村 昌也、飯野 賢治
助教 木村 圭一、森山 秀樹、
加藤 寛城、山本 宜孝、
吉田 周平、鷹合真太郎、
齋藤 大輔
医員5名、専攻医1名、研修医5名

研究分野の沿革

1883(明治16)年に金沢医学校の初代外科医長に木村孝蔵教授が任命され、一等教諭として本学の外科、当講座を開設したのが当教室の始まりであり、今年で135年を迎える伝統ある外科教室です。心臓血管外科、呼吸器外科、一般消化器外科すべての外科領域を網羅する大外科制の教室で、北陸を中心として全国各地に第一線で活躍する外科医を多数輩出しています。1949(昭和24)年に金沢大学医学部外科学第一講座となった講座名は、2001(平成13)年に金沢大学大学院医学系研究科 循環医学専攻 血管病態制御学大講座 心肺病態制御学講座となり、同時に附属病院での名称を心肺・総合外科としました。2008(平成20)年には附属病院の臓器別診療開始に伴い、心臓血管外科、呼吸器外科、内分泌・総合外科の外來診療部門を担当するようになりました。2015(平成27)年、現教授 竹村博文が第10代教授に就任。同時に金沢大学医薬保健研究域医学系 先進総合外科学(附属病院では先進総合外科)と名称を変更し、現在に至っています。

支部だより

能登支部

平成30年度金沢大学医学部十全同窓会能登支部総会・懇親会は、平成30年5月20日(日)に金沢大学消化器・腫瘍・再生外科学太田哲生教授をお招きして、和倉温泉ホテル海望で開催されました。晴天に恵まれ、14名の先生方がご参加下さいました。総会に先立ち、平成29年度物故会員6名：瀬野 孝先生(昭和25年卒業)、伊藤喜祐先生(昭和25年専卒業)、辻口 昇先生(昭和25年専卒業)、東福要平先生(昭和41年卒業)、倉知 圓先生(昭和41年卒業)、川口光平先生(昭和47年卒業)に黙祷を捧げました。

支部事業報告と会計報告に続いて審議に入り、能登でご活躍中の通常会員Ⅱの皆さまにも能登支部への入会をお勧めすることが満場一致で採択されました。昨年の支部総会で大学院修了者の支部入会が認められており、ようやく本部同窓会の入会資格と支部同窓会の入会資格を揃えることができました。

太田哲生教授のご講演に先立ち、新しい試みとして支部の若手会員によるミニ・レク

チャーを2題(1題15分)発表していただきました。恵寿総合病院家庭医療科 伊達岡 要先生(平成20年卒業)は「栄養×抗菌薬」と題して、また笠原健招堂薬局 笠原友子先生(平成28年院卒業)は「まちかどの薬局より実証例紹介ー 飽食の時代の栄養失調を考える」と題して、それぞれユーモア溢れる楽しい話題を提供してくださいました。太田哲生教授は、昨年会長を務められた日本消化器外科学会の会長講演をコンパクトにお示しいただきました。自己免疫メカニズムの一つである「ネットーシスNETosis」の概念を元に、重症敗血症患者に見られる白血球数抑制の機序を明快にお示しいただき、参会者一同深く感銘を受けました。

懇親会では最年長のご出席者である佐原吉博先生(昭和36年卒業)のご発声で乾杯し、

出席者各位の近況

報告をいただきながら、七尾湾の新鮮な海の幸に舌鼓を打ちました。たまたまこの日は同時刻に大きな法事会食が2組入っており、支部長よりも明らかに年長の

仲居さんは天手古舞いの忙しさで、申し訳ないくらいのものでした。楽しい歓談の時間は瞬く間に過ぎ、中締めを荒井邦夫先生(昭和39年卒業)にお願いして明年の再開を約し散会しました。

今回の参加者は以下の通りです。前列左から村本信吾(昭和42年卒業)、荒井邦夫(昭和39年卒業)、山本健(昭和48年卒業、支部長)、太田哲生教授(昭和54年卒業)、佐原吉博(昭和36年卒業)、八野田 実(昭和48年卒業)、神野正博(昭和60年院卒業)、後列左から 伊達岡 要(平成20年卒業)、鎌田 徹(平成3年院卒業)、笠原友子(平成28年院卒業)、斎藤靖人(昭和46年卒業)、佐藤就厚(平成9年卒業)、上木修(昭和56年卒業)、菊池 豊(昭和58年卒業)、敬称略。

(山本 健：記)



滋賀支部

6月10日(日)、梅雨らしい鬱陶しい日でしたが、滋賀支部総会を近江八幡市ホテルニューオウミにて開催いたしました。

本部から中村信一先生がご出席くださいました。先生からは私のリクエストで「十全会」のいわれについてお話いただきました。

その中で、倉知慎先生が生化学の新任教員に就任されたことを知り、代々にわたり大学に尽力いただけることの喜びとともに年月の流れの早さを皆で語り合いました。

今春は滋賀県からの入学者がゼロとのこともお話になりがっかりいたしました。交通機関の変遷等の理由もあらうかと思われます。

次いで、上島弘嗣滋賀医大特任教授(昭和46年卒業)に膠原病と著明な高血圧症に基づ

く闘病体験のお話をしていただきました。

その中で、塩分調味料ゼロの生活を自分で調理して楽しんでおられる様子を語られ、病と闘うより病とつき合って人生を楽しんでおられる姿に感服いたしました。

懇親会では各自近況を報告し、楽しく語り合いあつという間の3時間が過ぎ散会となりました。中村先生には早朝より金沢からお越しいただきありがとうございました。

なお、県支部長が浅野定弘先生(昭和42年卒業)から山本明先生(昭和46年卒業)に交代となりました。

当日の出席者(敬称略)

写真前列左より白石制(昭和41年卒業)、江竜喜史(昭和39年卒業)、中村信一(昭和43年卒業)、浅野定弘(昭和42年卒業)、上島弘嗣(昭和46年卒業)、三宅隆(昭和43年卒業)、朝日晋(昭和45年卒業)、後列左より安田美代子(昭和49年卒業)、和田義正(昭和60年卒業)、榎田昌之助(昭和53年卒業)、谷 徹(昭和51年卒業)、山本明(昭和46年卒業)、中西二(昭和53年卒業)、三浦克之(昭和63年卒業)

(朝日 晋：記)



岐阜支部

平成30年8月26日(日)に十全同窓会岐阜支部総会が岐阜市長良川河畔の「岐阜 都ホテル」で、金沢大学医薬保健研究域医学系教授の金子周一先生のご来岐を賜り開催されました。

今夏の岐阜は、連日最高気温が38℃台後半の異常ともいえる酷暑でした。8月も後半になり、気温もやや落ち着いていましたが、当日は朝から蒸し暑く、最高気温も35℃を超える猛暑日であったにもかかわらず、岐阜県支部会員11名の出席がありました。会を始めるにあたり、昭和24年卒業の大島正雄先生が平成30年5月にご逝去され、全員で黙祷を捧げました。大島先生は、前回、前々回の岐阜支部総会にもご出席され、お亡くなりになる直前まで赤十字血液センター嘱託医としてのお仕事をされていました。

その後、私、大西の司会のもと、岐阜支部総会を行い、まず支部長がこれまで長年務められてきた昭和39年卒業の米倉幸人先生から昭和51年卒業の大西に交代した旨が報告され、出席者全員の承認をいただきました。そして、岐阜支部の現状が報告されました。現在、登録されている岐阜支部会員は66名になっていますが、その中で約2割にあたる13名の先生方は岐阜県外の病院勤務あるいは岐阜県外でご開業となっています。特に平成17年以降のご卒業の16名の会員では3名を除いた13名の先生方が岐阜県外の病院

に勤務されている状況です。そういう事情もあるかもしれませんが、例年、支部総会への若い先生方の出席が極めて少ない状態でしたが、本年は数名の比較的若手の先生方にも出席いただきました。また会の中で、例年支部総会への出席率がよくないことも話題となりました。今後は若い先生方も含めて多くの会員の先生方に出席していただけるような魅力ある支部総会を目指していくことを出席者全員で確認したところです。

その後、今回の支部総会のメインイベントであるご来賓の金子周一教授のご講演を拝聴いたしました。金子教授はご出身が岐阜県で、高校まで岐阜で生活され、岐阜支部にとって非常にゆかりの深い先生です。新しくなった金沢大学の宝町キャンパスの写真等を見せていただき、さらに先生の最近の素晴らしい業績を拝聴して、出席者全員大変感銘を受けました。

その後の懇親会は、前支部長の米倉幸人先生の乾杯の音頭で楽しく始まりました。食事

をしながら、出席者全員の自己紹介、近況の報告がなされ、初めて支部総会に出席した先生もみられましたが、身近に先輩、後輩の存在を知り、お互いの絆を深める機会になったものと思われます。出席者全員で記念撮影を行い、金子教授はお帰りの列車のご都合で少し早めに退席されましたが、その後も話に花が咲き、予定の時刻を過ぎて次回の再会を約して散会となりました。

出席者記念写真(敬称略)

前列右より、國枝克行(昭和53年卒業)、大西弘生(昭和51年卒業)、金子周一教授、米倉幸人(昭和39年卒業)、徳永周二(昭和54年卒業)、後列右より、谷口 徹(昭和59年卒業)、高橋 健(昭和57年卒業)、望月清文(昭和57年卒業)、寺倉陽一(平成15年卒業)、森藤 豊(平成12年卒業)、渡辺幸夫(昭和56年卒業)、寺町光代(平成25年卒業)、二宮空暢(平成16年卒業)

(大西 弘生：記)



クラス会

39 会

毎年開催している39会が今年は4月7日(土)に愛知県犬山市の木曽川河畔、国宝犬山城の直ぐ下の名鉄犬山ホテルで周囲の満開の桜に囲まれて開催される予定でした。然しながら今年の桜の開花は予定より7日も早くて予定通り満開の桜の中での開催とは行きませんでした。天候には恵まれて寛永13(1635)年から行われ国の重要無形文化財、ユネスコ無形文化遺産に指定されている歴史のある犬山祭りの13台のからくり人形、365個の提灯を備えた3層作りの12台の山車も見物してもらうことができました。

当日直前には日本海側、高山、郡上方面には大雪による東海北陸自動車道の通行規制が出たりしましたので車で参加者が急遽列車に変更になったりしましたが、ご婦



人同伴者もあり総勢32名の参加で賑やかに開催できました。皆さん期待の満開の桜の中での開宴と行かなかった代わりに、名古屋音楽大学の小森先生率いるサクソ・カルテット(メテオ)のミニコンサートを楽しんでいただきました。今回も追悼の黙祷をすることもなくてすみ、海外の学会に参加して元気で活躍している人、ドイツ語を学ぶために短期語学留学する人、仕事を少なくして気楽にこなしている人、完全引退で趣味を楽しんでいる人など、奥様も交えて賑やかに談笑するうちに春の夜は更けてゆきました。

翌日は金沢由来の建築物(第四高等学校物理化学教室、第四高等学校武道場「無声堂」、

金沢監獄正門、金沢監獄看守所・監房)が移築されている博物館明治村の見学に行く人、ゴルフに行く人など一日を過ごし、来年は卒後55年に当たるので金沢で再会することを楽しみにして帰途に就きました。集合写真が上手く行かず、ミニコンサートの写真になりましたが参加者は下記のメンバーでした。

安積宏明夫妻、有川功夫夫妻、荒井邦夫、稲坂暢夫妻、岩泉九二夫、岩佐嘉郎夫妻、臼井溢、大竹憲治、北野(加藤)倫子、野垣俊幸夫妻、中島良明夫妻、三島勉夫妻、宮城徹三郎夫妻、中村一郎、矢吹朗彦、山田芳明夫妻、渡辺国重夫妻、米倉幸人、以上32名。

(米倉 幸人：記)

四八会

昭和48年卒業生の同窓会が、猛暑の平成30年7月15日に富山市ANAクラウンプラザホテルの最上階、立山連峰を見渡せる『天空の間』で行われた。富山は、新幹線開業により、金沢間が20分、東京間が2時間のアクセスである。現役生が昭和23年生れで、今年満70歳を迎える。学生時代、人体解剖実習中に7カ月のストライキを決行した学年である。多くの友が学生運動に走り、ノンボリの多くは麻雀とパチンコに夢中だった。今回、舩田昌之助君も初参加して、彼が教養部時代に編集した文集の逸話を語った。南真司君は今もテニスが上手で、地域医療で活躍している。遠く沖縄から大城、安里両君もきてくれた。勤務医の多くは、定年で新たな就職先に替わっていた。欠席の数人は病魔と戦っていると連絡があった、ガンバレ。

学生時代、ヨットや登山に恋した奴、雀荘に入り浸りの奴、下駄をカラコロン鳴らす奴、夜中口笛で遊びに誘う奴、キャバレー通



いの奴、バンカラの個性豊かな学年で、担任の教授からとんでもない学年だと言われた。でも団塊の世代で競争に勝ち抜いてきた輩は、皆しぶとかった。卒業試験や国家試験を切り抜けた後、一転して、臨床や研究に没頭し、研究者、教授、開業医、病院経営、医師会など各方面で才能を発揮している。

45年間のそれぞれの人生ドラマや近況を話している最中、夕暮れの立山連峰の中から、劔岳が鮮やかに現れた。久しぶりに参加した清水公男君が、俺はこの光景をみれて最高に幸せだと叫び、一同が劔岳と立山連峰の夕暮れを固唾を飲んで見入った。やがてカラオケが始まり、四高“南下軍の歌”を皆で雄々しく声高らかに謳った。

直近の5年間で逝ったのは、前産婦人科教授井上正樹君と御高齢の久保忠さんだった。その前には清水俊治、神川正、細川邦仁君、優しくいい奴らが先に逝った。今回、細川君の娘さんが特別参加して家族の近況を話してくれた。故人の息子、娘さんたちが立派に成長したのが嬉しい。西島雄一郎君が昨年ナッシュビルで皆既日食をみて感動し、人生観が変わったそうだ。富山で皆既日食が観察される十数年後、みな連者でいようと誓う。古稀を過ぎ、五感の衰えを感じるが、新鮮に感動する心は青春のままでありたい。金沢での再会の日は3年後の9月3連休である。数多くの友が笑顔で結集できることを願う。

(高田 正信：記)

平成10年度卒業生 記念同窓会



平成30年8月4日、ホテル日航金沢にて卒業後20周年記念同窓会を開催しました。前回10年目の同窓会を2月に開催した際は39人、今回は夏休み期間なので集まりやすいかと思いきや、逆に子供行事が被る方が多く、子育て世代の女性陣が参加しにくかったようで、結果37人。出席率は4割弱、なかなか忙しい皆様の都合を合わせるの難しいようです。

近年はfacebookなどSNSを使って、何気に遠方の方とも交流しやすくなっているため、20年ぶりに再会しても、割と親しみやすく話がしやすいなあと感じました。一見、外見が変わったような感じがしても、さすが6年一緒に過ごしただけのことはあり、眼が慣れ

てくると、中身も外見も特別変化していないことに気がつき安心しました。

一人ずつ壇上で近況報告をしてもらいましたところ、さすが卒業20年、現役バリバリに大学や大病院で最先端の仕事をしている方（教授になっている方もいるとか）、いつの間にか本まで出版してちょっとした有名人になっている方、医者業以外のビジネスをしている方、開業している方、海外で大活躍している方いろんな形で皆さん健闘されていて、とても良い刺激になりました。

普段の職場環境とはまた違い、同級生の集

まりは懐かしい安心感があり、とても楽しい時間を過ごすことができました。また数年後の再会を楽しみにしたいと思います。

出席者（敬称略）

堀川（岩橋）、佐藤（内山）、大倉、岡本（春）、小川、尾山、佐藤（金沢）、金子、北方、北川、巖、河野、小久保、島上、清水（研）、芹原、武田（匡）、竹原、玉地、富田、那須、井上（西田）、西野、能登、蓑、橋本、池野（畑中）、浜口、濱口、平沼、平能、御簾、向、砂崎（森（紀））、山本、渡邊（孝）、渡辺（卓）

（池野 幸子：記）

同窓生の消息

第68回日本病院学会 開催報告

石川県立中央病院名誉院長

山田 哲司

（昭和50年卒業）



平成30年6月28日（木）、29日（金）の2日間にわたり、石川県立音楽堂、ホテル日航金沢、ホテル金沢、金沢市アートホールの4会場において、第68回日本病院学会を開催いたしました。日本の約1/4の病院が参加する日本病院会が主催する本学会は、北陸で初めて開催されました。現在、急速な少子高齢化に伴う国民の医療・介護費用の増大、経済成長率の鈍化に伴う財源不足などの問題に直面し、社会保障政策にほころびが目立ってきています。そのため公平かつ平等な社会の育成に役立つ医療制度、持続可能なものとするための制度改革が、矢継ぎ早に行われている

ます。そこで、この学会のメインテーマを「医療制度ルネサンス～未来を見据え、今を創新する～」とさせていただきました。

特別講演は、評論家樋口恵子氏、作家の五木寛之氏、第11代大槌長左衛門氏の3人をお願いいたしました。また、医療制度改革に伴う「医療・介護を含めた今後の医療の在り方」を会員の皆様に考えていただくため、日本医師会会長、日本病院会会長、全日本病院会会長、全国自治体病院協議会会長、地域包括ケア病棟協会会長による特別シンポジウムを行いました。学会では、医師・看護師の働き方改革、専門医制度改革、オンライン診療、ピッ

グデータの活用、ICTを用いた地域連携、入退院支援、医薬分業などの病院経営・医療制度の創新に関する問題を中心とした19のシンポジウム、4つのワークショップ、572題の一般演題、28のランチョンセミナーを行いました。全国から、2000名を超える会員の皆様に参加していただき、実り多い情報交換の場となったと思っています。

最後に石川県の多数の病院長の先生方には、学会の司会をしていただいたこと、学会当日に病院職員の派遣をしていただいたことに厚く感謝を申し上げます。

十全昔話

私の「指導と信従」

西尾 功

(昭和34年卒業)

金沢大学一般教養部2年の時、ドイツ語の授業でハンス・カロッサの「指導と信従」(Führung und Geleit)を習った。これはカロッサが自分の先生や周りの人々から教えられたことを信じて従い、自分の生き方の糧にしてきたものを回想して綴ったものである。私も彼に倣って私の「指導と信従」を述べてみたいと思う。

医学部専門課程での指導

医学部専門課程で教えられ、印象に残っているものを2、3挙げたい。細菌学の谷友次教授から、授業を受けるものは教授より後に教室に入ってはならぬとの規則を申し渡された。朝8時半から始まる細菌学の講義に先生の後から一步でも教室に入ろうものなら規則違反で入れてもらえない。教えを乞うものの当然あるべき態であったと思う。衛生学の太谷佐重郎教授の授業は「吾人は…で始まる内容」で、学科試験は非常にむつかしく、答案に字数制限があった。「何々について50字以内で答えよ」の問題である。当時その意味は解らなかったが、後に、学会の演題申込の抄録に字数制限があり、これを若い医学生に慣れさせようと意図されたものであったと思う。眼科の倉知与志教授は「君達医学生一人を育てるのに国は一年で自衛隊15人分の給料を出している」と申された。脳目も振らずにしっかり勉強せよということか。耳鼻科の松田竜一教授は臨床講義で、たまたま金沢に来ておられたバイオリン教則本、スズキ・メソードの鈴木鎮一先生を臨時の講師に立てられ、音楽教育の理論を聴く機会を与えてくださった。鈴木先生は乳幼児の時からバイオリンの音を聞かせておくとバイオリンの音は普通にいつもある感覚になって特別のものではなく

なると話され、音楽教育の根本原理を学ばせてくださった。医学部3・4年の春と夏休みに医動物教室に通って附属病院検査部の松原藤継教授から病理標本の見方を教わった。あの木造の教室の、二階の広いお部屋に毎日朝10時に行くと2枚の病理標本のプレパラートが渡される、それを午後3時頃までに顕微鏡でよく観察し、本を調べて自分なりの診断をつける。午後4時にどやどやと教室の先生方も集まってこられて病理診断の過程を討論するのである。これは後々も非常に役に立った。昭和34年に卒業して、インターンは法医学の井上剛教授のご推薦で立川共済病院で受けることになった。そのご挨拶に教授室に伺ったら井上先生はご自分でおいしいお茶を入れて接待してくださった。大学紛争の時に厳しい態度をお示しになったあの井上先生の父親のような優しいご接待は、いま思えば禅語の「喫茶去」を地で行くようなものであった。東京でのインターンを終えて金沢に帰ってきて、さて何科に行くか。当時、病理学教室から入局のお誘いもあったが、松原先生にご相談申し上げたら、君は将来基礎をやりたいのか、臨床をやりたいのかと問われ、臨床をやりたいと申したらそれなら初めから臨床の教室に入ったほうがよいのではないかと言われた。結局、第二外科にいらていただくことになった。真摯に私の将来を考えてくださった松原藤継先生(のちに教授、日本臨床検査医学会会長)に今も感謝している。

臨床の態度と責任

第二外科の教授は本庄一夫先生で、教授着任一年目の教室は臨床、研究に活気に満ちていた。医局員の入局式の訓示で、「患者には親切でなければならない。へりくだる必要はな



いが十分な責任感のもとに親切にするべきである。できるだけ標準語を使うとよい。若い医師が方言でなれなれしくしゃべると、患者の機嫌のよい時はそれでもよいが、機嫌が悪くなると患者・医師の信頼関係が損なわれる」(私のメモ帳より)と話されたことを憶えている。ある時、集談会で発表する論文を持っていったら、君の言いたいことはどうゆうことなんだと問われて辟易したことがある。どんな小さなことであっても人の前で発表する時はそのNeuesをきちっと言わなければならない。ノイエスのない発表は意味がないと諭された。また、学会での口演はスライドを見ずに聞いている相手にも分ってもらえるよう、スライドなしでもわかるように工夫すべきであるとお言葉もいただいた。今日、ある論文に接するとその論文のNeuesは何かとすぐに考えてしまうのはこのへんから来ていると思う。教室での直接の指導をいただいたのは主に水本龍二先生(当時、朝日新聞の若い研究者助成賞受領中、後に三重大学教授)である。外科の教室に入って初めて教わったのは手術前の手洗いである。みんな手術場に連れていかれて、両手・両前腕にヨードチンキを塗って乾かし、目隠しされて10分間手洗いをしてヨードチンキを洗い落とすのである。自分の手洗いのどこに残しがあるかを知らされる。水本先生の手術は丁寧であった。手術は、あとで見えるところも見えないところも手を抜かずに丁寧にやる、最後の皮膚縫合のひと針まで慎重に正しくやることをいわれ、これは麻酔で意識のなくなっている患者に対する礼儀であると外科医の心がけを教わった。今日、医局制度が変質して昔の医局の師匠・弟子の関係が薄れているように見えるのは寂しい限りである。本庄教授が京都大学教授に転任されて、その後に着任された

水上哲次教授にも多くのことを教わった。手術は「最少の侵襲で最大の効果を挙げよ」がモットーであった。上皮細胞を起源とするがんの発生・発育はその上皮の下にある間質の機能に左右されるというのが先生のがん研究の持論で、先生のがん研究に参加させていたが、今日この視点でのがん研究の進歩はあまりみられていないように思う。水上教授は急な病で逝去され、その後、私は教室を辞して奈良で開業することになった。

開業の理念

昭和49年、金沢を去るに当たって、当時出羽町にあった国立金沢病院の玄関に入ってすぐの壁に掲げられていた文字、Ego anapause umas (私はあなたを休ませます 聖書のマタイ伝の言葉?)にひかれて、これを書き写してきてこちらの自室に貼り、開業医の理念とした。開業して間もない頃、ある人からお祝いに掛け軸をいただいた。東大寺管長の書「漁夫 生涯竿一本」である。送り主の心は、漁夫のように生涯釣竿一本で魚を捕って生きよ、医師は聴診器一本で診療のみに精出して、他のことはするなという教えと理解した。医師で医療以外の事業に手を出して失敗している報道を見聞きすると、自分を度してメス一本で医業のみに精進しなければならないと思う。昭和60年より支払基金の審査委員を22年間勤めた。ここでは色々な大学出身の医師達と交わることができて、多くのことを学び、世間を教えられた。国民皆保険制度のもとにあっては医療はほとんどすべて保険診療となる。診療報酬の支払いは出来高払いが原則である。しかし医療の中には現物給付でないものが少なからずある。就中、大事なムンテラ(口頭での治療)は支払い

対象にはならず、ほとんどお金にならない。それはそれでよいと思う。私の家ではお金を払う人(患者)が礼を言う、お金を受け取る人が礼を言うのでないことからみても医療は商売でないことがよくわかる。私は患者に優しさを欠いてはいないかと自分に問いかける。

家の近くに法相宗大本山薬師寺がある。薬師如来は「くすし」、つまり医師の総元締めと思って度々詣でている。薬師如来は過去佛ともいわれている。今の病気を治すためには過去を清算しなければならない。大酒を飲んで(過去)肝硬変になったものはまず酒を飲むのを止める(現在)ようにしなければ肝硬変は治らない。住職で管長の高田好胤猊下にかわいがっていただいた。「おのが現行(今、身をもっている行為、今、言っている言葉、今、思っていること)が種子(しゅうじ)となって阿頼耶識(あらやしき)(意識下の意識の倉庫(くんじゅう)に熏習される)。ある事態が生じるとその熏習されたものが出てきてその人特有の行動様式が発現する、というのが法相宗唯識の教えである。病人の病態を見るときにその病人の阿頼耶識にまで思惟しなければ本当によい医療は生まれてこないのではないと思う。薬師寺の年中行事に参加していると多くのことを感得する。薬師悔過の行(はなえしき)(花会式)は薬師如来の前で過去(さんげ)を懺悔して、国家繁栄、万民豊楽、五穀豊穰を祈る会式で、ここで行われている内容は日本の律令国家としての行事の原型が踏襲されている。例えば、家をたてるときに今行われている地鎮祭の所作は花会式の呪師の金堂の地清めの所作から派生したものと思われるのである。

これまでを振り返ってみて、実に多くの人々のお世話になってきた。自分は布施をしてお返ししなければならないと思う。向後は慎ましく食べて、死ぬまで元気に仕事を続けていきたいと願っている。



学生コーナー

医学類 4 年

井村 慎吾

十全同窓会の皆様、初めまして、医学類 4 年の井村慎吾と申します。

今夏は 9 月になっても残暑が続いていますが、この十全同窓会会報が皆様のお手元に届く頃には大分過ごしやすい気候になっているかと思います。

今回歴史ある十全同窓会会報に執筆する機会を与えていただいたことに恐縮する反面、嬉しく思っております。これまでの学生生活を振り返り、自身の考えをまとめ、今後の自分のあり方に目を向ける良い機会を与えていただいたとも感じております。稚拙な文章ではございますが、ご一読いただければ幸いです。

これまでの学生生活を振り返ると、講義に出席し、目の前の試験に追われ、休みの期間は思いっきり遊ぶということを繰り返し、あっという間の 3 年半でした。4 年生になって臨床講義が始まり、やっと病院で勉強させていただく機会も増え、少しずつですが医師としての仕事にリアリティを持って想像できるようになりました。これまでとは違い、中高生の頃と同級生の就活や社会人として働き、大変忙しそうな姿を見ると、自分も勉強を頑張らなくてはという思いに駆られます。そのような思いからこれまでとは勉強に向かう姿勢が少し変わりました。ここで、自分が医学部に入る前と今とでどのように考えが変わったかということについて述べさせていただきますと思います。私の出身高校は 1 学年 90 人にも満たない田舎のできたばかりの中高一貫校です。そこではグラウンドが猿の大群に占拠されることも、体育祭にはカモシカが出たこともあるほど自然にあふれた環境でした。最寄りのコンビニは徒歩で 40 分はかかるほどで 6 年間はかなり閉鎖的な環境で過ごしていました。大学生になって、自分には高校の先輩があまりいないので、一年生の時は高校

の先輩がたくさんいて、よくしてもらっている同級生を羨ましく感じていました。高校時代は、担任の先生の勧めもあり、医学部を受験してみようというのがきっかけでした。この先生は、勉強をがんばることは評価されるべきことという当たり前の価値観を私に再認識させてくれました。勉強面だけでなく、今の自分があるのはこの先生のおかげであると言える恩師のような存在でした。「孝行したいときに親はなし」という言葉があるように、残念なことに先生は事故に遭われ、自分が合格した姿を見せることはできませんでした。ですが、この先生をはじめとお世話になった人たちに報いたい一心で医学部に入りました。

そして、医学部に入ってひと段落つき、周囲の目に注意を向けるようになると、これまではなかった肩書きによる社会的なイメージが自分にも持たれていると感じるようになりました。自分としては一介の大学生に過ぎないという認識を持っていても、特にバイト先の人や初対面の人には医大生というだけで、真面目で、勉強家な人間だろうと想定して、接していただくことが多いと感じます(のちに、関係が深まればそうでないことがバレてしまうのですが)。本当にありがたいことではあるのですが、最初は驚きましたし、正直少し荷が重かったです。特にご年配の方から「あのような医者になってはいけないよ」、「こんな医者になってほしい」と言われることがあります。自身のイメージと持たれているイメージをすり合わせるのに苦労しましたが大学でのさまざまな活動を通して、そのような感情から次第に変化が生じてきました。今では、素直にこの人たちはどんな理想の医師像を持って自分にそのような言葉をかけてくださるのかということを考えるようになりました。多くのものを投資していただいて今の自分があるということを考えれば、それをどのように還元していくかということは考えなければいけないと思います。税金がかかっていることや献体によって勉強させていただいたことを考えると、両親やこれまでお世話になった人たちだけでなく、大げさかもしれま

せんが社会全体に還元する一種の責任みたいなものを漠然とですが感じ始めています。このことが入学後の自分の中の変化につながったのではないかと考えています。

対人関係を通しての変化以外にも、学問としての医学への向き合い方にも変化があったように感じます。具体的に、医学に向き合う姿勢に変化を与えてくれた出来事が 3 つあります。2 年次の解剖、3 年次の基礎配属、そして 4 年次の症例発表です。解剖では人体は教科書通りに精密に作られているのを目の当たりにし、人体の神秘さに心が動きました。さらに、慰霊祭や白百合会の方々とお話する機会があり、地域との繋がりや支えも感じることができました。3 年次の基礎配属では、私は薬理学の教室に配属させていただいたのですが、そこでは基礎研究の難しさや医療の進歩に与える影響の大きさについて学ぶことができました。また、4 年次には、大学病院に入院されている患者さんの症例発表を班で行う講義がありました。それによって、今まで勉強してきた内容が机上のものから現実味を帯びた知識へと変わり、これまでの勉強に欠落していた患者さんの視点が生まれました。少しずつではありますが段階を踏みながら、将来、医療人になるという感覚を持てるようになってきているのではないかと思います。

今後は医療人としてまだ間に合ううちにお世話になった人たちに恩返していきたいという思いが強いです。

最後に、学生代表としての仕事に戸惑うこともありましたが、さまざまなことを学び、経験させていただいて、自らの成長を感じることができ、代表として仕事をさせていただけることに感謝しています。今回この文章を書くにあたり、過去数年の先輩方の文章を読ませていただいたのですが、新聞のコラムや小説ではないのかと思うような完成度で、自分の未熟さを痛感しています。このような環境に身を置くことで今の自分に満足せず、常に挑戦したいと感じられる場所に居られることに感謝して、残りの学生生活に打ち込んでいきたいと思っています。

キャンパスビジット2018(オープンキャンパス)

日時／平成30年8月9日(木)

場所／医学類キャンパス

金沢大学医学類では本年8月9日木曜日に、高校2年生以上の入学希望者に医学類キャンパスを開放・公開し、キャンパス内を見学してもらうキャンパスビジットを開催しました。当日は猛暑の中、会場の十全講堂には、北は秋田県、南は沖縄県まで全国津々浦々から238名の参加者がありました。

午前、午後の2部制として、山本靖彦教育委員長による挨拶と私からのキャンパスライフの説明、谷口巧教授・三枝理博教授によるそれぞれ「医者になろうと思った理由」、「体内時計の脳内メカニズム」と題した医療・研究の最前線の紹介、教員・在学生との懇談会などのプログラムで医学類の紹介を行いました。午前の部では、山崎光悦学長が視察にみえられ、サプライズで一言挨拶を述べられました(写真)。懇談会では、参加者からの自由質問に教員・在学生から答えてもらい、医学類がどのような空間で、どのような教育や研究が



行われ、どのように社会とつながっているのかを実感していただけたことと思います。参加者のアンケートでは、「入学後の姿を想像できた」、「モチベーションが上がった」などといった感想が寄せられました。

金沢大学のキャンパスビジットは、一昨年来で医学類を含む全学類において2日間にわたって開催されていましたが、昨年度からは

1日に短縮され、代わりに他の関連行事を開催することに変更されています。短い期間ではありますが、キャンパスビジットは入学希望者の皆さんが今まで体験したことのない、知的な活動が実践されている現場でこそ味わえる独特な雰囲気を感じとってもらう良い機会になっています。

(学生支援委員長 西山 正章：記)

医学展2018

日時／平成30年10月27日(土)・28日(日)

場所／医学類キャンパス

昨年に引き続き医学展を開催することが決定いたしました。2018年度医学展開催に向けて同窓会の皆様方にはご協力を賜り、医学展実行委員一同深く御礼申し上げます。

金沢大学の医学展の歴史は古く、1952年に遡り、今年で連続開催13年目となります。一昨年は3500人、昨年は悪天候にもかかわらず3350人もの方に足を運んでいただきました。医学展は地域の方々に難解でとっつきにくいと思われがちな医学の世界をより身近に感じてもらう、興味を持つきっかけを提供できる場です。それと同時にまだまだ未熟で医学的知識が完璧ではない私たち学生が普段は受け身で学んでいる医学を発信する側に立つことで理解を深め、自分自身の学習姿勢を見つめ直すことのできる機会だとも思っ

ております。このような貴重な学びの場である医学展を今年度も開催させていただけることに感謝し、先輩たちが築き上げてきた伝統を胸に誠心誠意取り組ませていただきます。

今年の医学展のテーマは「line」としました。そこには、今までバラバラだった医学的知識の集合や現在と未来の健康志向、地域の方々と医学生の関係といった点と点が「line」になることを願いました。私はこれまでも医学展に参加してきましたが、毎年感じることは医学展は我々一般的な医学生が唯一できる地域貢献の場ではないかということです。文化祭として盛大に健康の維持、増進を動かせることのできる場が存在することはまさに地域医療の実践に他ならないと感じております。この文化祭を通して子供たちには将来を考えるきっかけを与え、大人の方には健康を見つめ、自分のことをもっと知っていただきたいと思っています。

今年の企画として仮想現実(Virtual

Reality)を通して医療現場を体験していただき、さらに進んだ現実空間に仮想空間を重ねたMR(Mixed Reality)に関して、現役医師にしてMRアプリ開発研究者である杉本真樹先生をお招きして最前線医療技術が体感できる講義をしていただきます。また今年は、日本におけるドクターヘリによるヘリコプター救急の第一人者である、松本尚先生にご講演いただけることになり、より医学に特化した内容になりました。皆様の期待を超えられるよう精一杯努力いたしますので、昨年より一層充実した医学展にぜひ足をお運びください。

医学展という恵まれた機会に感謝し、医療保健学域の学類と学年を超えて皆で力を合わせ、全力で楽しみながら取り組ませていただきたく存じます。末筆ではございますが、日頃からのご支援、ご鞭撻に感謝して挨拶とさせていただきます。

(金沢大学医学展2018実行委員長

白石 裕紀：記)

平成30年度 関東研究医養成コンソーシアム

第9回夏のリトリート 開催報告

平成30年8月16・17日の2日間、金沢商工会議所をメイン会場として、「平成30年度 関東研究医養成コンソーシアム 第9回夏のリトリート」を開催しました。この研究医養成コンソーシアムは、国内の9大学(北海道大学、東北大学、群馬大学、千葉大学、東京大学、順天堂大学、横浜国立大学、山梨大学、金沢大学)で運営している研究医養成プログラムで、医学類生／医学部生の研究成果を発表しお互いの交流を深める機会として、そして将来の医学研究者の育成を目的として、毎年夏に開催しているものです。金沢大学ではMedical Research Training (MRT)プログラムに参加登録し研究活動を行っている医学類生がこれまでも夏のリトリートに参加してきました。昨年度の大会で、金沢大学が平成30年度夏のリトリートの主管校に選ばれ、約1年を掛けて学生と教員スタッフで開催の準備をしてきました。主管校学生代表は、医学類4年の森田一矢君で、実行委員3人(手塚聡君、南川真季さん、中村紗都さん)を含めた学生4名が中心となり、総勢22名の学生スタッフと、6名のMRT担当教員スタッフ(多久和陽教授、堀修教授、河崎洋志教授、山本靖彦教授、三枝理博教授、赤木紀之准教授)で協力分担し運営をしました。参加者は、本学を含む53名の医学生、18名の教員スタッフと、石川県・福井県の医学部進学を目指す6名の高校生の計77名と、さらに金沢大学からの来賓である山崎光悦学長、中村信一前学長・十全同窓会会長、向智里理事・副学長、大竹茂樹理事・副学長、和田隆志医学類長、そして特別講演の2名の演者でした。来賓の先生方からは、ご挨拶並びに研究に励む学生達へ激励のメッセージをいただきました。特別講演の演者は、安藤敏夫特任教授(金沢大学ナノ生命科学研究所／WPI NanoLSI)と常山幸一教授(徳島大学病理学／金沢大学医学部平成4年卒)でした。安藤先生からは「動作中のタンパク質分子の高速原子力顕微鏡(AFM)による直接観察」というタイトルのご講演で、ミオシン分子がアクチン繊維上を「歩く姿」の観察に成功するという画期的な研究成果をご紹介いただきました。常山先生か

らは「病理学的なものの見方・考え方のスミ～病理・形態学をハブとした研究者ネットワークの構築とその先に～」というタイトルで、ご自身のキャリアパスや研究内容を非常に分かりやすくご紹介いただき大変好評でした。

学生による口頭発表は、金沢大学医学類6年の鍛冶稔君を含む計8名の発表があり、会場では教員顔負けの素晴らしい質疑応答が繰り返されていました。ポスター発表は、計31演題の発表があり、金沢大学からは7演題(手塚聡君、坂本和之君／佐藤教裕君／吉野航君、森田一矢君、杉本淳子さん、榎本真大君、増田涼香さん／下崎琳さん、森田英典君／古川敦君／渡辺優磨君)の発表がありました。多様な研究領域からの発表で、会場では各所で熱く議論が繰り広げられていました。ポスター発表と並行して、ポスター会場の一角では高校生向けのミニ講義が開催されました。また、学生企画として「即興プレゼン～ワールドカフェスタイル～」が行われ、AI化に伴い次世代の医師に求められるスキルについて学生間で議論が行われました。1日目の夜には金沢ニューグランドホテル内で懇親会を開催し、金沢の郷土料理や地物食材を使用した食事が振舞われ、大学間や学年を超えた医学生同士、そして学生・教員間の交流や繋がり場となりました。このような普段では

味わえない親睦を深められるのも夏のリトリートの醍醐味の一つとなっています。

最終日の閉会式に、各大学の教員の先生方から講評をいただきますが、今回の第9回夏のリトリート金沢大会は例年にもまして充実した実りの多い、そしてレベルの高いリトリートであったと好評でした。参加者の皆様は、観光地としてもランキングの高い金沢の夏を満喫していただいたようです。改めて第9回夏のリトリート開催準備に関わった学生スタッフと教員スタッフ、そして特別講演をお引き受けいただきました安藤先生、常山先生、さらに来賓の先生方に感謝を申し上げます。来年度は東京大学が主管校となり東京開催となります。金沢大学医学類MRTプログラムは、引き続きリサーチマインドを持った医学類生の育成に取り組んで参ります。引き続き金沢大学医学部十全同窓会会員の皆様からのあたたかいご指導ご鞭撻を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。最後になりましたが、平成30年度 関東研究医養成コンソーシアム 第9回夏のリトリート開催にあたりまして、ご後援いただきました金沢大学十全医学会、石川県医師会、金沢市医師会、金沢大学医学系、医学類医王保護者の会、(財)済美会に心から御礼を申し上げます。

(山本 靖彦：記)



第12回金沢大学 ホームカミングデイ開催

今回で12回目となる、「金沢大学ホームカミングデイ」を10月27日(土)に開催いたします。今年も、午前中にキャンパス見学会を計画しました。金沢大学ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第55回金大祭」(10月27日(土)～10月28日(日))の開催期間中であり、さらに「ふれてサイエンス&てくてくテクノロジー」、宝町地区では「医学展2018」が開催され、各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「あのころの金沢大学」を開催いたします。

歓迎式典、特別講演及び懇親交流会(参加費無料)は、角間キャンパスの紅葉をお楽しみいただきながら、お気軽にご参加いただけるよう、企画しております。ご家族や同期生、サークル仲間みなさまとご一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

◎参加費：無料

◎申込み締切：9月28日(金)

◎申込み・プログラム等の詳細は下記へお尋ねください。

【金沢大学学友支援室】

TEL 076-264-5081

FAX 076-234-4033

メール gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

(学友支援室 小川 典久：記)



昨年の第11回ホームカミングデイの様子(学長挨拶)



がんに負けない 希望をつくれ。

人がしないことに、挑戦する製薬会社。

ムンディファーマ



nihon
medi+physics

明日の幸せを願い、 「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、疼痛緩和に有効な治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

for the happiness

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)

<http://www.nmp.co.jp/>



日本メジフィジックス株式会社

2018年8月作成

お知らせ

十全同窓会WEBサイトをリニューアルしました。

<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

これまで以上に見やすく利用しやすいサイトとなっております。

ぜひご覧ください。



hhe
human health care

患者様の想いを見つめて、 薬は生まれる。

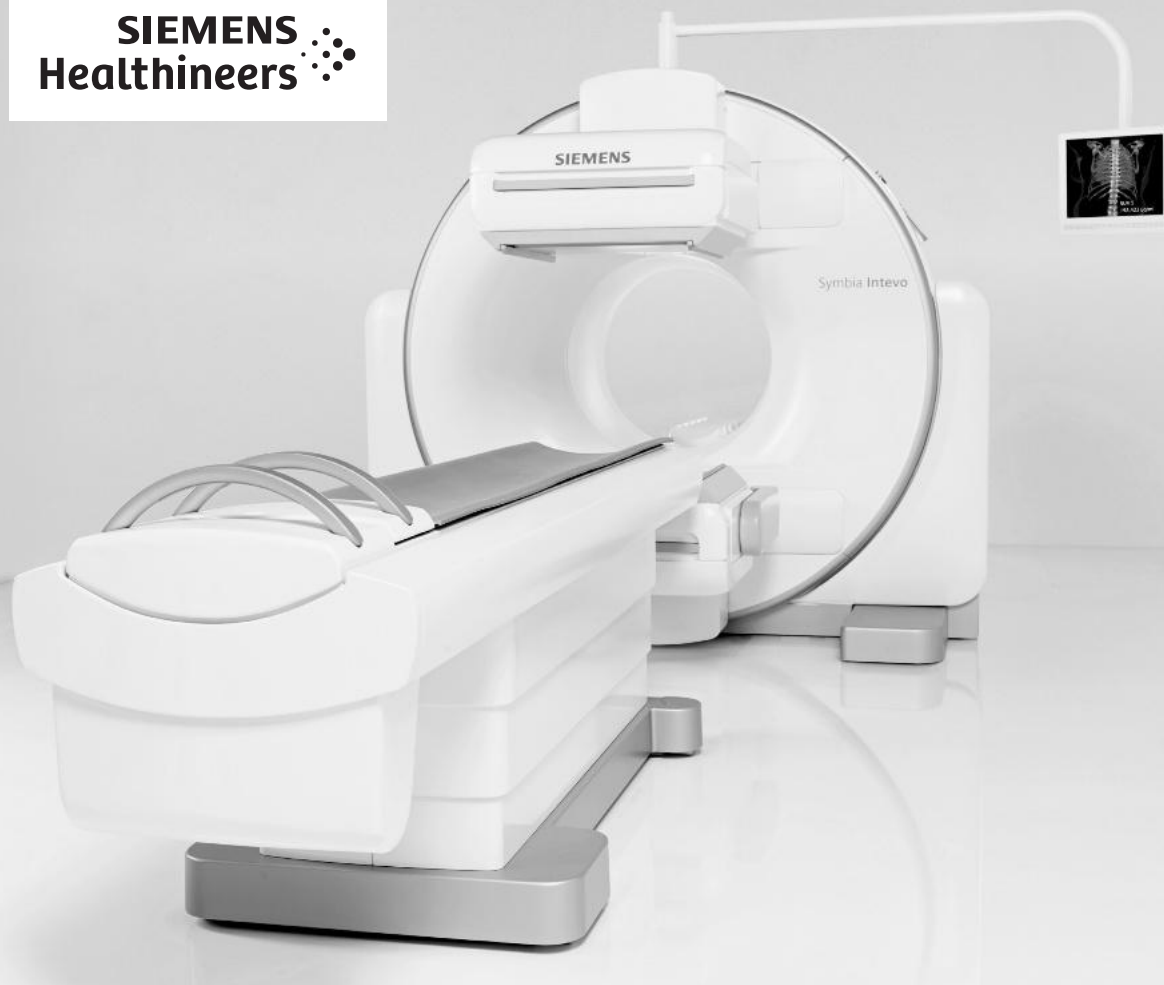
顕微鏡を覗く日も、薬をお届けする日も、見つめています。
病気とたたかう人の、言葉にできない痛みや不安。生きることへの希望。
私たちは、医師のように普段からお会いすることはできませんが、
そのぶん、患者様の想いにまっすぐ向き合っていたいと思います。
治療を続けるその人を、勇気づける存在であるために。
病気を見つめるだけでなく、想いを見つめて、薬は生まれる。
「ヒューマン・ヘルスケア」。それが、私たちの原点です。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ



A FUTURE FREE OF
Chorea Alliance

エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。



SPECT・CTシステム

Symbia Intevo

次世代SPECT・CTへの進化を遂げた 「xSPECT」という新たな領域へ。

Symbia Intevoは、SPECTとCTの情報を同じマトリクスで高精度に融合するイメージアライメント技術「xSPECT」を搭載しました。xSPECTにより、圧倒的に解像度の高いSPECT画像が得られ、微細な病変を鮮明に描出します。更に、これまでのSPECT・CTでは実現できなかった定量計測*が、病態のモニタリングや治療提携を深め、画像診断の信頼性を高めていきます。

——— 「Symbia Intevo」がSPECT・CTの新たな可能性を広げます。

*密封線源によるクロスキャリブレーションファクターを活用した計測。

www.siemens.co.jp/healthineers

X線CT組合せ型SPECT装置

シンビア T

承認番号:21800BZY10184000

シンビア T6 / T16

承認番号:21800BZY10185000



早く治ってほしいという 願いを、チカラに。

未だ適切な治療法が確立していない疾病の数は
2万以上とも言われています。

さらに、治療は可能でも早期に診断がつきにくい、
治療や検査が決して楽ではない、一般に理解されにくいなど、
医療分野にはまだ満たされていないニーズがあります。

私たちバイエル薬品は、「早く治ってほしい」という
強い思いを原動力として、
さまざまなニーズに応えていきます。
よりよい暮らしのために、これからもずっと。

Science For A Better Life



ひとりひとりの 笑顔にいたい。

皆さまのすこやかな明日のために、全力を尽くすこと。

優れた医薬品づくりを通じて、社会に貢献すること。

それぞれの思いや悩みを受け止め、一緒に解決を考えていくこと。

私たちは、健康への願いや夢に向かって歩む皆さまにとって、
心から信頼のおけるパートナーでありたいと願っています。

私たちは、一丸となって、あなたの笑顔に役立ていきます。

〔資料請求先〕



富士製薬工業株式会社

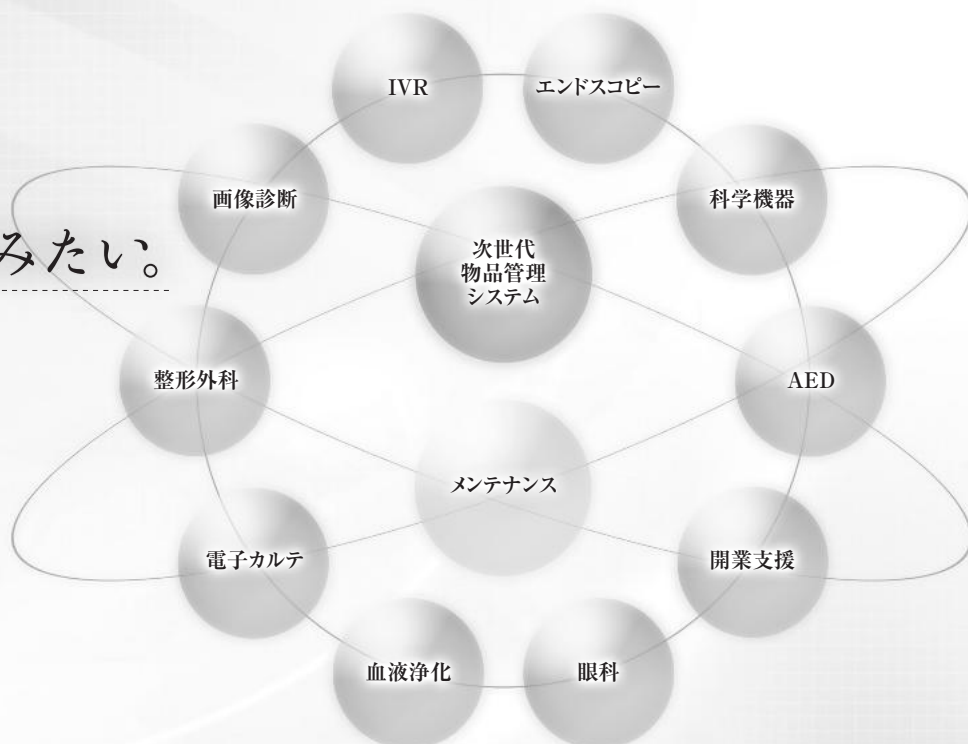
〒102-0075 東京都千代田区三番町5番地7

<http://www.fujipharma.jp>

2011年6月作成

♡+α=Smile!

医療とともに
大きな夢を育みたい。



富木医療器株式会社

<http://www.tomiki.co.jp>

本社 〒920-8539 金沢市問屋町2-46 TEL (076) 237-5555 (代) FAX (076) 237-6584
支店 金沢・富山・福井 営業所 七尾・高岡・敦賀

The 30th Anniversary

これからもよろしくお願いします

『臨床医療に携わる皆さまのお手伝いをしたい』

『患者さまや病院のお役に立ちたい』

『地域医療を支えたい』

そのような想いをこめ、1989年の創業以来およそ30年システムを作り続け、PSPのシステムを導入させていただいたご施設様が累計1000サイトを超えました。

今日の私どもがありますのは、ひとえに、皆さまのご指導の賜物と存じ関わってくださった全ての皆さまに厚く御礼申し上げます。

医療システムは **PSP** 株式会社

〒106-0031 東京都港区西麻布4-16-13 TEL 03-5485-1028 www.psp.co.jp

GE Healthcare



Partners for Better Health

Helping You Achieve Desired Outcomes

先生方が求めるアウトカム(結果)を達成するための
パートナーとなるべく 全力を尽くします

GEヘルスケア で検索

JB37591.JA

卓越した臨床

ACHIEVE
CLINICAL
EXCELLENCE

患者満足向上

INCREASE
PATIENT
SATISFACTION

検査効率の改善

IMPROVE
OPERATIONAL
EFFICIENCY

戦略的成長

DRIVE
STRATEGIC
GROWTH

経営改善

IMPROVE
CAPITAL
PLANNING



未来へ駆ける。

人との繋がりを大切にしながら、
わたしたちは、走り続けます。



セントラル メディカルグループ

医療機器総合商社

セントラルメディカル株式会社

本社

〒920-0024 石川県金沢市西念3丁目1番5号

TEL:076(262)1111(内) FAX:076(223)7255

金沢支店・富山支店・福井支店

<http://www.centralmedical.co.jp/>

福祉用具レンタル・販売

株式会社メディベック

本社

〒920-0024 石川県金沢市西念3丁目1番5号

TEL:076(224)5600(内) FAX:076(224)6116

金沢営業所・富山営業所・福井営業所



ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る”舞台”という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸随一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一(縁)のおもてなし。



一期一(縁)のおもてなし。



ホテル日航金沢
hotel nikko kanazawa

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1 (JR金沢駅兼六園口前)

Tel:076-234-1111 Fax:076-234-8802

ホテル日航金沢 検索 www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員(13名) 学外編集委員(22名)

太田 哲生	山口 成良
蒲田 敏文	柿下 正雄
中村 裕之	津川 龍三
横山 茂(副編集委員長)	多留 淳文
絹谷 清剛(編集委員長)	赤祖父一知
篁 俊成	佐藤 保
和田 隆志	三輪 晃一
佐々木素子	橋本 琢磨
谷口 巧	中村 信一
山本 靖彦	勝田 省吾
中田 光俊	山本 健
毎田 佳子	山本 博
濱口 儒人	山岸 正和
	大村 健二
	横山 仁
	大島 徹
	横山 修
	中本 安成
	常山 幸一
	古川 健治
	若山 友彦
	中西 清香

以上35名で構成されています。
土屋弘行十全同窓会理事長には、
編集委員会にご参加いただいております。



表紙の写真
金沢大学附属病院の正面玄関

18年間をかけて行われてきた金沢大学附属病院の再開発事業は、平成28年6月に完成しました。正面玄関から入るとホスピタルブロムナードを中心に、中央診療棟・外来診療棟・病棟の3エリアがコンパクトかつ機能的に連携するよう配置されています。

題字：中村 信一(十全同窓会会長)

発行：金沢大学医学部十全同窓会

会報編集委員会

〒920-8640 金沢市宝町13-1

<http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp>

発行日：平成30年9月29日

印刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

名簿改訂は5年毎に変更となりました。
次回改訂版(2020年)は、従来と同様に会費納入者へお届けいたします。

編集後記

今回の十全同窓会会報第170号は絹谷清剛編集委員長のご尽力によりデザイン、レイアウトが刷新された記念号となります。縦書きから横書きへ、またカラーとなり、さらに読みやすくなったと思います。コストの面では、多くの方々の支援があり、無事に発刊に至りました。

2018年の夏、異常気象と自然災害が次々と日本を襲いました。7月には西日本から東海地方を中心に広い範囲で大雨が続きました。特に広島県、岡山県で甚大な被害をもたらし、気象庁は“平成30年7月豪雨”と命名しました。7月中旬以降は記録的な高温が日本列島を包みました。7月下旬からは頻りに台風が日本を通過し、特に8月28日に発生した台風21号は25年ぶりに非常に強い勢力で、日本各地で観測史上1位となる暴風を記録しました。高潮により関西空港の滑走路が浸水し機能停止に至りました。さらに9月6日は誰も予想し得なかった北海道に震度7の地震が発生し“平成30年北海道胆振東部地震”と名付けられました。土砂災害を伝える映像はいつまでも脳裏に残りました。各地でご活躍さ

れる会員の皆様の中にもこれらの自然災害に遭われた方がいらっしゃると思います。心よりお見舞い申し上げます。

一方、社会においては働き方改革が浸透し、これが医師にも波及し労働の認識が変わりつつあります。ただ、医師は一般の職種とは異なる側面が多々あり、企業の働き方改革が即座に適応できないと考えられ、政府レベルで議論が進んでいます。患者、医師両方に良い方向に向かうと信じています。

私は20年以上前の学生の頃よりこの会報を楽しみにしておりました。知っている先輩方の記事があると食い入るように読んでいました。この度編集委員を拝命し、早速編集後記を執筆する機会をいただき大変うれしく思っています。今回も多くの先生方に玉稿を頂戴いたしました。内容は盛り沢山です。会報の中にきっとご存知の懐かしい先生方の記事を見つけることができると思います。日頃のお忙しい仕事の合間に、気軽にお手に取って一服の清涼剤のような会報になれば幸いです。

(中田 光俊：記)